

第24次プロジェクトチーム

研究紀要

思春期から幼児教育を問い直す
～今までの研究成果の検証と新たな視点～



一般社団法人 大阪府私立幼稚園連盟教育研究所

発刊にあたって

テーマ「思春期から幼児教育を問い直す」

～今までの研究成果の検証と新たな視点～

これからの時代……。

それは少子高齢化、グローバルな経済活動や人種の交流の深まり、社会構造の変革、そして今までにはない職業の増加。また、これからの主要な能力（キーコンピテンシー）の育成、思考力・探究力・表現力の育成などが意識され、求められるようになってきます。

下村博文前文科大臣が平成26年11月に中教審に諮問された「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」では、以上のような視点やキーワードが挙げられていました。

受験勉強に代表されるような学力ももちろん重要なのですが、諮問では以下の視点も学力として取り上げています。

- ◆「基礎的な知識及び技能」
- ◆「これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力」
- ◆「主体的に学習に取り組む態度」

これら、いわゆる学力の三要素から構成される「確かな学力」をバランス良く育てることを目指し、教育目標や内容が見直されるとともに、学級やグループで話し合い発表し合うなどの言語活動や、各教科等における探究的な学習活動等を重視することとされたところです。

※平成26年11月の諮問より

今回のテーマは思春期から幼児教育を振り返って見ると、どんな示唆が見えてくるのだろうかという視点でもあります。

子どもの頃どんな遊びをしてきたのか。

子どもの頃どんな家庭で過ごしてきたのか。

子どもの頃どんな友だちと遊んできたのか。

どんなものを見て、触って体験して、感じて……という積み重ねの上に今の私がいる。

育ちの連続性は、積み重ねてきたものの結果の連続性でもあります。

また、その時代に求められた教育テーマは、その時代に問題とされたことの解決策でもあったはずですが。教育の取り組みはPDCAサイクルのように今の実践や実態を見て先を考え、実行するという営みもありますが、過去を振り返って検証することで、今とこれからに対してより客観性を得られることもあるのだと思います。

サブタイトルに挙げられたように、今までの研究成果の検証から新たな視点が見いだせることに期待を寄せて取り組んできたこの成果物から、皆さんの実践に何らかの示唆が提供されることを願っています。保育現場の仲間と共に読みいただければ幸いです。

2016年3月吉日

一般社団法人 大阪府私立幼稚園連盟

理事長 水谷 豊三

目次

はじめに：第24次プロジェクト研究の経緯	1
第24次プロジェクト研究員	3
第Ⅰ部 これまでの研究プロジェクトを振り返る	5
第1章 問題と目的・方法	7
第2章 第9次から第21次プロジェクトの振り返り	8
第3章 まとめ	48
第Ⅱ部 思春期から幼児教育を問い直す 事例研究	51
第1章 問題と目的・方法	53
第2章 事例研究	55
第2章1節 事例研究1：子どもと子どものかかわりあいを中心として	55
第2章2節 事例研究2：子どもと保護者のかかわりあいを中心として	65
第2章3節 事例研究3：保育者と保護者のかかわりあいを中心として	75
第3章 事例研究のまとめ	82
第Ⅲ部 全体のまとめと今後の課題	87
第1章 全体のまとめと今後の課題	89
第2章 24次プロジェクトに参加しての振り返り	92
あとがき	96

はじめに：第24次プロジェクト

テーマ「思春期から幼児教育を問いなおす」 ～今までの研究成果の検証と新たな視点～

（テーマ設定の理由）

「いじめ」や「不登校」の問題は、現代社会が抱える社会病理のひとつであるといえます。従って、問題の究明には社会とのかかわりという論点が不可欠であり、それも問題が顕在化している「今」の社会とのかかわりだけでなく、それ以前（乳幼児期）までさかのぼって考えていくことが必要です。

なぜなら、ほとんどのケースで思春期といわれる小学校の高学年から中学校にかけて引き起こされる問題行動は、その時期だけを捉えて原因の究明を図っても、難しいことが多いからです。そこは因果論的に過去にまでさかのぼり、その時期その時期にどのような体験をしたかまでを検証してゆかなければ、思春期の「心の闇」まではなかなかたどり着けないからです。

「幼児期の育ちの結果は思春期に顕れる」と言われますが、幼児期の心身における様々な経験は、その後の育ちに大きな影響を及ぼすであろうことは容易に想像できます。となれば私たち幼児教育に携わる者は、子どもの「今」だけでなく、「先」を見通した保育の実践がこれからも必要になってくるでしょう。勿論、思春期に見られる数々の行動は、幼稚園での保育の結果というよりは、むしろ、家庭生活をも含んだ、幼児期の生活全般といった方が分かりやすいかも知れません。従って、私たち保育者はより家庭との連携を密にしながら、建設的にかかわりあいながら、質の高い保育を実践していくことが求められます。

一方、大私幼では今日まで様々な研究プロジェクトを立ち上げ、時代と向き合いながら研究活動を続けてきました。取り組んだテーマはすべてその時代、その時代における幼児教育の課題でもありました。例えば、2年保育が主流でまだ3歳児保育が普及していない時代には、3歳児保育の必要性やそのカリキュラムの在り方について研究がなされました。又、預かり保育に取り組む園が徐々に増えだしたころには、預かり保育や子育て支援についての研究がなされました。直近では、5歳児就学論が再燃したことに伴い、5歳児が幼稚園で生活することの意味について子どもの立場からの研究がなされました。

（研究の進め方）

このように、大私幼がプロジェクトとして取り組んできたテーマは時代のニーズに応じたものであり、そういう意味では社会と密接に結び付いたものであるといえます。今回のプロジェクトは大きく社会とのつながりも視野に入れたものであるので、これら過去に研究されたものをもう一度見直し、検証していく中で、新たな示唆が与えられるのではないかと考えます。

これらを整理すれば、今回のプロジェクトは

- ① 過去の研究成果を改めて見直し、テーマと社会とのかかわりについて考えてみることに、
- ② 思春期を見通した幼児教育の在り方について考察を深める



という2つの柱を立てながら「心の育ち」を中心に研究を進めていこうと思います。

今回は、幸いにも大阪人間科学大学人間科学部子ども福祉学科教授の須河内貢先生に助言者をお願いすることが出来ました。先生のご専門は発達心理学、教育心理学、保育心理学であり、子どもたちの「心の発達」を理解する上において、様々なご教示を頂けるものと期待をしております。

子ども達が将来、「いじめる側にも立たない」「いじめられる側にも立たない」保育とはどのような保育なのか、皆様方と一緒に考えていきたいと思っています。

一般社団法人 大阪府私立幼稚園連盟教育研究所

所 長 原 史 臣

第24次プロジェクトチーム参加者

★講師 須河内 貢 先生 (大阪人間科学大学人間科学部子ども福祉学科)

藤 川 幸 子	(小松幼稚園)
安 達 祐 一	(みくにひじり幼稚園)
奥 村 綾	(みくにひじり幼稚園)
端 保 依 子	(池田旭丘幼稚園)
辻 佳奈子	(庄内こどもの杜幼稚園)
小野寺 敦 子	(せんりひじり幼稚園)
飯 田 有 希	(穂積幼稚園)
花 岡 美 穂	(茨木みのり幼稚園)
温 品 早 織	(天王学園幼稚園)
永 岡 澄 子	(大阪愛徳幼稚園)
福 田 恵美子	(たちばな幼稚園)
小 林 真由美	(御幸幼稚園・さくらんぼ保育園)
喜屋武 春 菜	(大阪ひがし幼稚園)
浦 田 綾	(大阪商業大学附属幼稚園)
築 地 典 子	(大阪商業大学附属幼稚園)
岡 本 秀 美	(関西女子短期大学附属幼稚園)
浅 井 るり子	(光明台幼稚園)
宗 千 景	(双百合幼稚園)



第 I 部

これまでの研究プロジェクトを振り返る

第1章 問題と目的・方法

第1節 24次プロジェクト全体の問題意識

24次プロジェクトは「思春期から幼児教育を問いなおす」というテーマの下、「これまでの研究プロジェクトの振り返り」と「思春期から幼児教育を問いなおすための事例研究」という2部構成で研究を進めてきた。研究全体を通しての問題意識は下記の通りである。現代の日本社会を生きる思春期の子どもたちが抱える問題点として、たとえば、不登校やいじめの問題、自尊感情の低さ、積極性のなさ、生きるためのエネルギーが発揮できていない等が、その主要なものとしてあげられる。こうした問題点を前にして、私たち保育者に出来る事は、「いかにしてそのような事態に陥らないようにしていくのか」あるいは「そうした問題に巻き込まれても、しなやかさをもって立ち向かい、問題を克服し、自らの育ちの糧にできるようになっていくのか」について、保育の視点からとらえ、子どもたちが被害者にもならず、加害者にもならないための保育実践を積み上げていくことだと考えた。

つまり、就学前期に限定した視点ではなく、思春期までを視野に含む、長期的視点に基づく保育の在り方について検討していく必要があると考えた。さらに、人が生きていく上での重要な課題の一つとして「人と人とのかかわりあい」があげられるが、本プロジェクトでは、これを主たる研究対象として、幼児期に限定しない長期的視点から、幼児教育を再考していくこととした。

第2節 第1部「これまでの研究の振り返り」における目的

本研究の目的は下記の通りである。大阪府私立幼稚園連盟はこれまで、どのような問題意識に基づきテーマを設定して、どのような方法によって、どのような研究成果を得てきたのかを明確にしていく。そうすることによって、幼児教育における現代的問題と過去における問題との歴史的なつながりについて検討し、今、問うべき課題を明確にしていく。そして、思春期を見据えての幼児教育の在り方について考察していく。

第3節 第1部「これまでの研究の振り返り」における方法

本研究の方法は下記の通りである。平成元年の幼稚園教育要領の改訂後の第9次から第21次までのプロジェクトを対象として、その内容を下記にしたがってまとめ、全体でディスカッションしていく。

- ①当該プロジェクトの問題意識
- ②当該プロジェクトの方法
- ③当該プロジェクトの研究成果
- ④当該プロジェクトの研究成果から思春期を見据えての幼児教育の在り方について考察する



第2章 第9次から第21次プロジェクトの振り返り

- (1) 第9次プロジェクト① テーマ：幼児の主体的な活動を促し、幼児期にふさわしい生活が展開されるようにすること
報告者：大阪商業大学附属幼稚園 築 地 典 子

- (2) 第9次プロジェクト② テーマ：遊びを通しての総合的な指導
報告者：双百合幼稚園 宗 千 景

- (3) 第9次プロジェクト③ テーマ：ひとりひとりの発達と個性に応じた幼稚園教育
報告者：池田旭丘幼稚園 端 保 依 子

- (4) 第10次プロジェクト① テーマ：障害児教育の実践と課題
報告者：光明台幼稚園 浅 井 るり子

- (5) 第10次プロジェクト② テーマ：子育て環境の問題について
報告者：たちばな幼稚園 福 田 恵美子

- (6) 第11次プロジェクト① テーマ：子どものことばと生きる姿
報告者：せんりひじり幼稚園 小野寺 敦 子

- (7) 第11次プロジェクト② テーマ：「人とかかわる力を養う」保育とは
報告者：関西女子短期大学附属幼稚園 岡 本 秀 美

- (8) 第12次プロジェクト テーマ：乳幼児を持つ家庭への支援の在り方
報告者：みくにひじり幼稚園 奥 村 綾

- (9) 第13次プロジェクト① テーマ：幼稚園における子育て支援プログラムの効果を検証する
報告者：茨木みのり幼稚園 花 岡 美 穂

- (10) 第13次プロジェクト② テーマ：預かり保育
報告者：天王学園幼稚園 温 品 早 織

- (11) 第14次プロジェクト テーマ：子どもの側に立った3歳児保育を考える
報告者：大阪商業大学附属幼稚園 浦 田 綾

- (12) 第15次プロジェクト テーマ：子どもに根ざした指導計画の創造的編成をめざして
報告者：大阪愛徳幼稚園 永 岡 澄 子

- (13) 第16次プロジェクト テーマ：幼稚園建築を考える
報告者：御幸幼稚園・さくらんぼ保育園 小 林 真由美
- (14) 第17次プロジェクト テーマ：5歳児が幼稚園で生活する意味を問い直す
報告者：穂積幼稚園 飯 田 有 希
- (15) 第18次プロジェクト テーマ：保護者との建設的なコミュニケーション
報告者：庄内こどもの杜幼稚園 辻 佳奈子
- (16) 第19次プロジェクト テーマ：「聞く」「話す」ことからコミュニケーションへ
報告者：小松幼稚園 藤 川 幸 子
- (17) 第20次プロジェクト テーマ：発達が気になる子どもの理解と援助
報告者：大阪ひがし幼稚園 喜屋武 春 菜
- (18) 第21次プロジェクト テーマ：子どもの“不思議”の世界を育む
報告者：みくにひじり幼稚園 安 達 祐 一





【第9次プロジェクト】 平成2年～3年

指導：京都大学 教授 村 井 潤 一

《テーマ》

幼児の主体的な活動を促し、幼児期にふさわしい生活が展開されるようにすること
ー幼児期にふさわしい生活の展開ー

《背 景》

自由に遊ぶ→設定保育→生活習慣的活動→課題活動などが組み込まれているこれまでの教育要領に即した実践から、新教育要領に則した子どもの自発的な遊び（コーナー保育や選択活動、異年齢編成の遊び）を中心とした実践に移行していく中で、諸所の問題が浮かび上がってきた。

《目 的》

本研究の目的は、幼児が主体的に活動を展開していくことができる生活を構築するために必要なこととして下記2点について検討していくことである。

1. 子どもの思いと教師の願い
2. 保育の中でのけじめ

《方法・取り組み》

1. 子どもの思いと教師の願い

幼児の行動は、幼児自身の主体性によるところが多い。このことから、実践例を通して、保育者の願いに支配される保育活動と、幼児自身の思いの「ずれ」を協議、考察していく。

2. 保育の中のけじめ

3歳児・4歳児・5歳児の実践報告とアンケート調査をもとに考察

《結果と考察・研究成果》

1. 子どもの思いと教師の願い

教師の願いや思いが強すぎると、それが子どもを圧迫してしまう。教師の思いが伝わらないときは、子どもの思いと食い違ってないかということを考えてみる必要がある。そこに教育の原点があると考ええる。

2. 保育の中のけじめ

一人ひとりの子どもの思いを知り、保護者とのギャップを考慮しながら“けじめ（しつけ）”の基準をどこに置くかが難しいが、新教育要領の精神をふまえて考え“これだけは守ってほしい＝身につけさせたい”という教育のねらいを明確にして、画一性と差別を排除して対応するのが、望ましいという結論になった。

《24次プロジェクトに繋げるまとめと考察》

以上の紀要は20年前のものであるが、今現在も同じ課題は残っている。子どもの思いを尊重しすぎると自由と放任の区別が曖昧になり、けじめがつきにくくなる。また、けじめをつけることを重視しすぎると教師の願いが強くなり、子どもの主体性が失われがちになる。しかし、将来この社会を生きていく子ども達には、「けじめ」も「主体性」もどちらも大切で、自由の中に自主、自立できるセルフコントロールの力を身に着けることで思春期をしなやかに、自分らしく過ごすことができるのではないだろうか考える。

大阪商業大学附属幼稚園

築地典子





【第9次プロジェクト】 平成2年～3年

指導：大阪樟蔭女子大学 教授 名 倉 啓太郎

《テーマ》

遊びを通しての総合的な指導

《背景》

平成元年の幼稚園教育要領改定は、「幼稚園教育は環境を通して行うものであること」「幼稚園生活の全体を通してねらいが総合的に達成されること」という観点の共通理解をねらったものである。教師指導型の遊びでなく、子どもの自発的活動としての遊びの中で何が学ばれるのかを検証する必要があった。

《目的》

1. 「幼児教育の基本である“遊び”の本質＝子どもが主体的に取り組む活動である」という事について認識を深め共通理解した上で、保育形態・環境構成・配慮・援助活動を追求していく。
2. 新教育要領で問うている教育のねらい（心身の調和的発達の基礎）を総合的に達成するための遊びとはどんな活動なのか考察する。

《方法・取り組み》

・事例の持ち寄りと検証

1年目：遊べない子、遊ぼうとしない子の事例研究

保育者の子どもの見方の検討。幼児の主体的活動としての遊びの捉え方や指導的展開について検討。

2年目：遊び込んでいる子どもの姿の事例研究

遊び場面、環境への配慮、保育者のかかわりを検討。どのように指導し、保育を展開していくか、また遊びによって何が学ばれるのか、どういう育ちが見られるのかを検討。

《結果と考察・研究成果》

1年目は、「遊べない子・遊ぼうとしない子」に焦点を当てた事例に対する質疑応答や助言を聞く事によって、それぞれの子どもの特性や課題が新たな視点で見つかる結果となった。その中で子どもの背景や発達に配慮して関わることの大切さに気づき、自らの保育への確信や自信に繋がったという成果が見られた。

2年目は、1年目で得られた「遊びの本質」の共通理解や価値観の共有を活かしながら、“遊び全体”の事例検証が展開され、遊びの中での保育者の役割が具体的に明確になっていった。同時に、キーパーソンになる子どもの動きや発言に注目し、リーダーシップやコミュニケーション能力の育ちについての期待も言及された。

《24次プロジェクトに繋げるまとめと考察》

思春期において、しなやかに問題に対応し、人との関わりの中でアサーティブなコミュニケーション能力を発揮する為の土台は、五感を使った自発的な遊び環境の中でこそ育ってゆくものと考ええる。この様な遊びの中で保育者がどのように配慮、援助したら良いのかについての指針を与えてくれる9次プロジェクトの研究内容は、思春期に向けての育ちに大いに有効であり、参考になるものであった。遊べない子どもの背景を知り、保育者のどの様なかわりが子どもの力を育むのかという課題意識を明確に持ち、日常の保育に取り組むことで、思春期の問題解決能力育成へアプローチしていきたい。

双百合幼稚園

宗 千 景





【第9次プロジェクト】 平成2年～3年

指導：京都大学名誉教授 佛教大学教授 中 島 誠

《テーマ》

ひとりひとりの発達と個性に応じた幼児教育

《背 景》

教育現場で登校拒否、学校内暴力、いじめ問題が深刻化している中、教育課程が改定された。

《目 的》

教育課程の基準が改定されたのは、まずは幼稚園教育において、教育を本来の姿にかえそうとしたものと考え、幼稚園教育を通じて、どのように個性と社会性を育てていくかを考察する。

《方法・取り組み》

1年目 基礎的な勉強

「ぼくこんなことしゃべったよー幼児の言語と思考」（中島誠編、ひかりのくに）を中心に研究。

2年目 事例研究

クラスで任意に選んだ子ども2名を中心に、子どもたちの話し合いを記録。記録の中から、問題点を見つけ出す。

《結果と考察》

「効率主義」の教育が日本近代化と産業の発展にとって大きな推進力になったことは否めない。しかし、急激な変化であったため無理が生じ、歪みが起こっている。

こうした社会的背景に鑑み、幼児教育では、心身ともに元気に学校生活をおくるために成績ではなく、考える力を育てる事、そして、ちょっとしたことでつまづかない、生命力の強い子に育てるということが大切である。

《24次プロジェクトに繋げるまとめと考察》

この時代の教育問題は、登校拒否・学校内暴力・そして暴力化したいじめとあるが、10年経った今、それは改善されないばかりか、より深刻化して当たり前のように教育現場で起こっている。

いじめを無くす為に子どもたちをいじめられない子に育てる、すなわち画一的な個性のない子に育てる、こうした発想では、この問題は解決しない。また、いじめられている子どもだけに、立ち直る強さを求めるのではなく、当事者たちも、その周りの子も柔軟な心を持つことで、問題行動を、解決したりなくしたりできるのではないかと考えられる。

その柔軟な心を育てる種をまく時期として、幼児教育の期間が最適のように感じる。成績を気に

したり、大人にとってのおとなしい良い子を育てるのではなく、子どもの五感に訴える保育を行う事で、たくさんの経験を与え、たくさんの種をまくことで、心の柔軟さと自己肯定感を育てることが問題解決につながると思う。

また、私たちは小学校・中学校で起こっている問題を幼稚園には無縁なものと思うのではなく、日頃の保育のなかで問題の当事者となる子どもを育てているのではないかという意識を持たなくてはいけない。

学校法人森上学園 池田旭丘幼稚園

端 保 依 子





【第10次プロジェクト】 平成4年～5年

指導：和歌山大学教授 田 川 元 康

《テーマ》

障害児教育の実践と課題

《背景》

平成元年に幼稚園教育要領が改訂され、翌年の平成2年度から実施された。改訂された大きな点の一つに、活動中心の画一的な保育の傾向を改め、一人ひとりの幼児の特性に応じた保育を実施し、その子の成長や発達状況とその経過をしっかりと見極めることを目指すことが挙げられる。この内容は、まさに従来から障害児保育の領域で重視されてきた事柄と合致しているといえる。また、平成4年は、「国連・障害者の10年」の最終年にあたり、この10年の締めくくりの審議が行われ、障害者の機会均等化に関する標準規則が国連総会において採択された。LDの分野では、平成2年に全国LD親の会が設立され、平成4年に日本LD研究会（現在の日本LD学会）が設立された。また、平成5年には、学校教育法施行規則の一部が改正され、通級による指導が制度的に開始された。

《目的》

当時の大私幼の理事長であった木島幼稚園の南先生が障害児教育のよき理解者でありつつも、「可哀そう…」とか「出来ない」と諦めるだけでなく、幼児期からの適切なしつけや指導が重要と考えられたと共に、障害児の問題行動の原因が母親の接し方にあるとされてきた、それまでの誤解をといていきたいという願いがあった。

《方法・取組み》

研究対象は、当時、障害児の中でも特に対応に苦慮していた自閉症児と比較的関心が高かったダウン症児について研究されている。

開始当初は、量的な資料に基づいての研究と質的な把握を長所とする研究がなされる予定だったが、量的な資料、つまり大私幼加盟園へのアンケート調査は、色々な問題が考えられる為、割愛され、質的な把握を長所とする事例に基づく研究が中心となった。自閉症児1例・ダウン症児2例・言語障害2例が発表され、障害児保育の問題点や課題が検討されている。それと同時に、「わかりやすい心身障害学」をテキストとして、田川先生が講義され、ゲスト講師や自園での経験が豊富な園長先生からの報告も聞いて研究された。

《結果と考察・研究成果》

近年、障がい、特に発達障がいに関して早期発見及び早期療育の発展には目を見張るものがあり、行政機関も地域の療育システムの充実発展に力を注いでいるという印象がある。しかし、20年前は、まだ障がいへの理解があまりなされておらず、早期発見では成果が見えていたものの、その後の療

育が立ち遅れていたのが実態だったと思われる。そのうえ、自閉症という障害を初めて発表したL. カナー博士ですら、初めの頃、障害の原因を母親の初期療育にあるとしていたため、障害を持つ子の母親たちの苦しみは非常に大きかったと思われる。

そんな中、このころより障害者の人権が尊重され、療育にも目が向けられ、多くのサポート体制が産声を上げていった。こうした時期に大私幼の教育研究所で障害児保育の研究がなされたことは、保育の現場で日々子ども達と接している幼稚園教諭が、生きづらさを感じている子ども達の一番の理解者であり、母親のよき応援者であろうとすることの重要性を示せたのではないかと感じた。こういう現場からの地道な声が功をせいし、平成7年ごろから中央教育審議会でも障害児への積極的な対応が採択されていったと考える。

光明台幼稚園

浅井 るり子





【第10次プロジェクト】 平成4～5年

指導：大阪教育大学 助教授 服 部 祥 子

《テーマ》

子育て環境の問題について

《背 景》

「モノの氾濫」「情報過多」「核家族化・都市化・少子化」という時代の中で、子どもを囲む環境にも変化が生じてきた。この時代、バブルは崩壊していたが、好景気の余韻はまだ残っており、「モノ」は豊かであるが「ココロ」は貧しくなっているのではないかという危惧を抱いている保育者も多かった。「情報過多」については、テレビでの影響がきわめて大きく、安易に受身的に情報が入り込んでくる環境が問題視された。「核家族化・都市化・少子化」は昔のような大家族や近所つきあいの中で子育ての知恵を受け継いだり、支え合ったりすることがほとんどなくなった社会で、親子関係がもろくなってしまったことが指摘されていた。

《目 的》

子どもたちが置かれている現状を把握して問題点を探っていく。

《方法・取組み》

1. アンケート調査：①保護者対象……………A「母性に関する調査」
B「父親の存在感に関する調査」
C「子どもの育児環境に関する調査」
②幼稚園教諭対象…気になる園児の実像
2. 事例研究：アンケートの結果を踏まえながら、問題の背景や対応策を報告

《結果と考察・研究成果》

アンケート調査結果から、この時代の子どもたちの問題点として下記3点が浮かび上がってきた。

- ① 言葉でのコミュニケーションが下手で、感情の表出がアンバランス
- ② 指示されるまで何もしない
- ③ やさしさが少ない、人と和み合うことができない

これらの問題のルーツとして、家庭ではココロよりモノ的環境の豊かさが優先されていること、健康な言語発達が阻害されるテレビを始めとする情報環境が氾濫していること、子どもの欲求（ニーズ）を大切にしない扱いが欠乏していることが挙げられた。また、社会では自然体験でなく機械的・人工的な体験が増加していたり、遊び場が欠落していたりする現状が挙げられた。この問題（①、②、③）は、そのまま思春期の危機的状況になっており、思春期の危うさは、幼稚園時代にすでに見られるということから、幼稚園教師の目に映るこれらの問題点は、しっかりと意識されて

対応されるべきという、警鐘が鳴らされた。

《24次プロジェクトに繋げるまとめと考察》

上記に挙げられた①②③は思春期の問題点としても叫ばれている点であり、保育者も問題意識として持っていなければならない。しかし、幼児期は有能さを示す場面も多いが、全般的にみると絶対的に経験は不足しており、その意味ではあらゆる領域の初心者である。子どものできないことへ焦点化していくのではなく、「あなたのここ、すごいね」というポジティブな視点で個性を長所として認め、「自己肯定感」の育ちへとつなげていきたい。思春期の壁について考えるとき、やはり「自己肯定感」が基盤としてしっかりと根付いていることによって乗り越えていけるのではないかと考える。その形成を幼児期にしっかりと培っていくために、保育者としてかかわる我々は一人ひとりの育ちを丁寧に見守っていきたい。

たちばな幼稚園

福 田 恵美子





【第11次プロジェクト】 平成6年～7年

指導：大阪教育大学 教授 早 川 勝 廣

《テーマ》

子どものことばと生きる姿 ―一人一人の理解をどう深めるか―

《背景》

遊べない子ども、無気力な子ども、指示待ちと言われる子どもが増加

《目的》

新幼稚園教育要領の中心は、幼児の主体的活動であり、すなわちそれは「意欲を育てる」ということである。意欲＝活動＝能力の循環の中で育つ保育を目指すにはどうすれば良いのかを考える。

《方法・取組み》

1. 事例研究
2. 「子どものことば生活実態調査」の実施

《結果と考察・研究成果》

1. 幼稚園教育要領の改訂の1番のポイントは＜子どもの主体性の育成をはかる保育＞、すなわちいかに意欲を育む保育を行うかである。なぜ意欲を育てることが重要なのか。保育者主導の管理型の保育によって、子どもの多くが確実に消極的で意欲の低い活動しか取り組みなくなっていった。つまり活動への意欲がなく活動の質が高まらず、活動を通して能力も高まらない育ちの悪循環を生きる子どもが生み出された。意欲的な学習活動が子どもの努力を引出し、集中力や持続力を引き出す。意欲ある学習という活動の質の問題が明確になった。結局のところ、子どもの豊かな育ちは豊かな生活を通して保障される。子どもは体験すればするほど育つ。それは、子どもが生きる世界が拡大し、知識が増え、ことば数も増え、イメージも豊かに育つことになるからである。
2. 実践報告からは以下のことが読み取られた。ことばは生活行動を支え、仲間作りを支え、認識活動を支える。そしてことばは生活の中で育つ。生活が豊かでなければことばも豊かに育たない。ことば育ては生活作りであり、人育てそのものでもある。

《24次プロジェクトに繋げるまとめと考察》

このプロジェクト研究から、子どものつぶやきの中には子どもの育ちを考えるヒントがあり、手立てがあることがわかった。子どものつぶやきを生み出しているのは、子どもの心なのである。したがって、子どものつぶやきを丁寧にたどることによって、子どもの心とその育ちを読み取っていくことができるのである。

子どもの心の中に育ってほしいのは自己肯定感と、自分の存在や思いが尊重されることにより培われる自信である。こうしたものが子どもの心に育つためには、保育者がどれだけ子どもの気持ちに寄り添えるかが大切になる。では、寄り添うとはどういう事なのだろうか？それは子どもの気持ちに共感することといえよう。すると、子どもの育ちを支える保育者は子どもの気持ちをしっかり受け止めて、共感できる存在でなければならない。そしてどんな場面においても、その時の子どもの思いを最も大切にし、子どものことばにならない思いを汲み取る力が必要になる。

こうした、目に見えにくい幼児期にしか育たない大切なものが育っているかいらないかが、青年期になって様々なかたちではっきりと表れてくるのではないだろうか。結果ではなく、目の前にいる子どもの気持ちに思いを巡らせながら、育とうとしているところ、がんばっているところを読み取っていく。保育者も保護者も目で見ることができない子どもの育ちをしっかりと捉えることができれば、子どもが育つ力を信じ、肯定的にみることが自ずとできるはずである。

せんりひじり幼稚園

小野寺 敦 子





【第11次プロジェクトチーム】 平成6年～7年度

指導：大阪市立大学 助教授 岩 堂 美智子
常盤会短期大学 助教授 吉 田 洋 子

《テーマ》

「人とかかわる力を養う」保育とは 一親と保育者が力を合わせたいことー

《背 景》

現代社会では、遊ばない子どもや遊べない子どもがますます増えた。

《目 的》

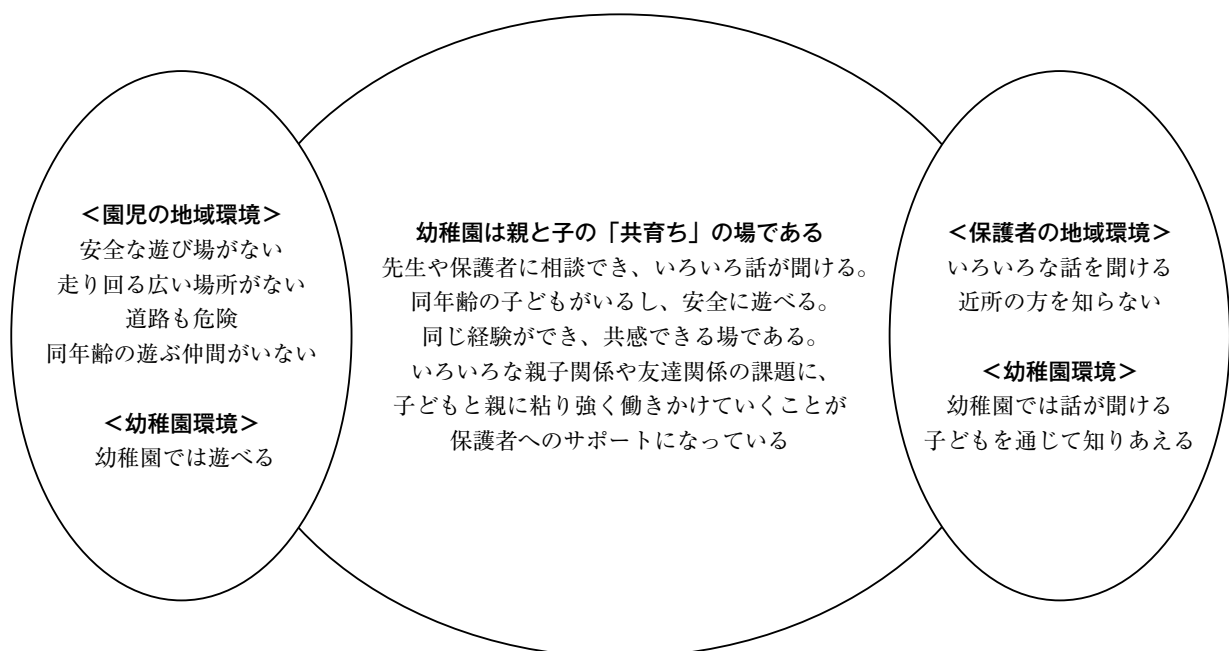
本研究の目的は下記2点を明確にすることである。

1. 人と関わろうとする力の基盤は何か。
2. 大人のどのような援助が人とかかわる力を育てるのか。

《結果と考察》

幼稚園生活が子の育ちだけでなく、親の育ちともなり、そして人と人との交流の場になっている。同年齢の子どもを持つ親には、そのような環境が必要である。

また、幼稚園へ通うことは、子どもと親の「共育ち」の場になっている。それは、保育者がいろいろな親子関係や友達関係の課題に対して、子どもと親に粘り強く働きかけることが基盤となり生じていると考えられる。そうした意味において、幼稚園教諭は地域社会の代表選手として母親へのサポートになっており、きっと大きな力になっていることと思われる。



《24次プロジェクトに繋げるまとめと考察》

本研究がなされたところから、幼児を取り巻く環境は変化していないように思われる。あるいは、保護者の子どもへのかかわり方を見てみると、より一層かかわり方がわからない保護者が増加し、また過干渉な保護者が増加しているように思われる。子どもたちよりも保護者の方が、コミュニケーションが取れなくなっていると感じるほどである。

そうした現状を鑑みれば、幼稚園という場所で子どもたちは遊びを通じて知り合い、かかわり合うことの楽しさや喜びを味わうことが、これまでよりもより重要な課題となってきたといえる。そして、保護者には、幼稚園とは人と人が励まし支え合いながらかかわっていく場である、ということ積極的に知らせていかなければいけないと思われる。私たちは、そうした役割を担っていかなければいけないことを強く感じる。

関西女子短期大学附属幼稚園

岡 本 秀 美





【第12次プロジェクト】 平成8年～9年

指導：大阪府立大学 助教授 倉 石 哲 也

《テーマ》

乳幼児を持つ家庭への支援のあり方

《背景》

高度経済成長期を生きた人が親として出現しはじめ、偏差値が絶対的な価値のような錯覚に陥り、教師から見た子どもたちの観点もそれに大きな影響を受けた時代である。

《目的》

子育て支援の実態を把握し、幼稚園として子育て支援をいかに行うかについて検討する。

《方法・取組み》

1. 調査研究・事例研究・相談技術の部に分かれて研究
 - ・幼稚園として親を取り巻く環境を理解し、親の立場に立って、以下の2点について検討する。
 - ① 親の養育観及び養育上の諸問題を把握する（調査）
 - ② 親の実態把握（要望・把握）とそれに応じた対応ができているのかについて検討する（事例分析）
2. 幼児を持つ家庭への支援のあり方を考えるための、家庭支援アンケートを実施する。

《結果と考察・研究成果》

〈調査研究の部〉

ストレスを抱えている母親の相談相手の中に幼稚園、先生という選択肢が少ない現状がわかった。
「開かれた幼稚園を」といいながら、親からすれば話しにくい雰囲気があるようだ。

〈事例研究の部〉

幼稚園が子育て支援を行う上で、連携や連絡を取り合う他の機関や地域の情報、サービスをまだ十分に把握できていない現状がわかった。

〈家庭支援アンケート調査より〉

ストレスを抱えている母親が約8割、うち子どもに関するものは約5割を占めた。この結果から幼稚園として何らかの形で関わっていく必要性が見えた。

親の気持ちを受け止め、親の思っていることを幼稚園が把握し、親と対話できる関係を作る必要性があると思われる。

《24次プロジェクトに繋げるまとめと考察》

この研究がなされていた頃から、現在に至るまで、家庭支援の重要性という点においては、何も

変わっていないように感じた。幼稚園児を持つ親が、ストレスや悩みを抱えている現状は、昔も今も変わりはなく、さまざまな子育て支援を、実際に行っている園は増えてはいるものの、親のストレスや悩みは、軽減しているようには思えない。幼稚園として「親の気持ちを良く理解する」という姿勢を常に持ち、子育て支援＝親支援ということを認識する必要性は、現在においても不可欠である。また、思春期を見据えた家庭支援という点においては、相談技術の重要性、継続的な関わりの重要性など、まだまだ幼稚園において、課題として取り組んでいく必要があると感じる。

みくにひじり幼稚園

奥村綾





【第13次プロジェクト】 平成10年～11年

指導：大阪府立大学 助教授 倉 石 哲 也

《テーマ》

幼稚園における子育て支援プログラムの効果を検証する

《背景》

地縁・血縁ネットワークに期待できない現代においては、幼稚園と保育所との垣根が低くなり、両施設とも子どものための施設であると同時に、親に対する支援施設であることが求められている。

《目的》

現在実施中の各園における子育て支援プログラムの位置づけを確認し、その目的を達成できているのかについて検討する。そうすることによって、保護者ニーズ・地域ニーズに応じたプログラムを考案する。具体的な目的は下記の2点である。

1. 子育て支援の効果と課題の分析
2. 保護者へのサービスが子どもの育ちを保障できているのかについて検討する

《方法・取組》

1. 各園が実施するプログラムの事例検討
2. 比較的どの園でも実施されている4つの子育て支援プログラムについての質問紙調査

《結果と考察・研究成果》

(1) 預かり保育

- ・保護者にゆとりがあると、子どもの変化を肯定的に受け止めることができる。
- ・仕事を持つ保護者は、子どものいなく孤独感を心配したりするし、実際に孤独感を感じている子どももいると思われる。また、保護者自身の自己の充実に向けた活動を行うためだけに、預かり保育が存在するわけではない。保護者と子どもの関係性を視野に入れてプログラムを進めていく必要がある。
- ・母子分離した方が、保護者と子どもの関係性が向上し、互いに発達できる場合もあり、そうした場合には、積極的に預かり保育を活用した方が良い場合もある。

(2) 保育理解のためのプログラム

- ・幼稚園の方針を理解してもらうには、保護者同士のポジティブな情報交換が必要なので、保護者グループが必要となる。保護者の主体的参加による、自治組織としてのグループの熟成が、子ども理解（子育て不安のほとんどは保護者同士の話し合いで解決可能）、園理解を進めていく力となる可能性がある。

(3) 課外活動

- ・保護者同士の交流に発展するまでは進んでいない。
- ・幼稚園は地域に遊び場がなく、仲間集団が形成しづらい環境改善を企図しているが、保護者はそうした意識はなく、子どもの発達を期待している。結果として、保護者同士の交流や幼稚園との関係強化としてではなく、個別の親子関係の強化を支援する活動となっている。
- ・環境面ではなく、発達に関心があるのは、保護者が個人志向にあるためと考えられる。
- ・結果のフィードバックがしやすく、目的と活動内容と結果の流れが理解しやすいということが、保護者がこうした活動を受け入れやすい一つの要因と考えられる。

(4) 保育参加型プログラム

- ・楽しみながら、保護者同士の交流や園の方針を理解したり、保育者理解、子ども集団の発達の意義等を体験的に理解できるため、子育て支援に有効なプログラムと考えられる。
- ・家とは異なる子どもの様子を見ることができ、友達の名前を覚えることによって共通の話題が増える。
- ・共通の体験が、保護者同士の交流を深める役割を果たしている。
- ・参加した保護者が他児から認められることによって、自尊感情を高めることができる。これが、園との関係、保護者と子どもの関係、保護者同士の関係強化につながっていると考えられる。

(5) まとめ

- ・4つのプログラムは、子育て支援の目的を達成しているといえる。
 - ①預かり保育：保護者がリラックスして、子どものことを、ゆとりを持って考えることができる
 - ②保育理解のためのプログラム：子どもが喜んで参加することで保護者が安心する
 - ③課外活動：具体的な目標に向かって保護者と子どもで取り組むことができる
 - ④保育参加型プログラム：保育を体験することで保護者自身が子どもや園のことを積極的に考えることができるようになる
- ・今後は、保育者の意識を高め、保護者理解を深めていき、保育者と保護者は子どもの成長を見守る社会的パートナーという認識を持ちながら関係性を高めていく必要がある。
- ・プログラムの実行性は証明されつつあるが、保育者が保護者や子どもの意識に目を向けることを忘れたとき、プログラムは形骸化する。何を目指しているのか、親や家庭に期待するもの、フィードバックの在り方等、常々考える必要がある。
- ・地域ニーズ等も捉えて、地域を巻き込んだ共同作業も必要となろう。

《24次プロジェクトに繋げるまとめと考察》

現代の幼児教育の在り方を考えるうえでも、子育て支援プログラムは必要不可欠なものであることが、この研究により立証されている。幼児期の特徴として、自我の発達や社会性の発達が位置づけられているが、言葉の獲得もまだ乏しいため、トラブルが多く、保護者自身そのことで悩んだりストレスを抱えることが、多い時期であると考えられる。その為、子育て支援プログラムを導入することにより、保護者にゆとりができ、客観的に子どもの姿をみることが増えることにより、感情



的に子どもを叱ったり、怒ることが減り、子どもの自我や自尊感情を育てる為に大切な、褒めること、認めることが増え、良い保護者と子どもの関係を築くことができる。また、保護者のネットワークにも広がりが見られ、良好な保護者同士の関係が築かれることにより、良好な保護者と子どもの関係が築かれる要因と考えられる。この時期に良好な保護者と子どもの関係を築けることで、子どもの心が満たされ、子どもが安心して社会生活を過ごすことができる。このことは、今後の思春期に向けてとても大切なことなのではないかと感じる。幼児教育では、子どものみならず、保護者のサポートをすることがますます重要になると思う。

学校法人茨木学園 茨木みのり幼稚園

花岡美穂



【第13次プロジェクト】 平成10年～平成11年

指導：甲南大学 教授 羽 下 大 信

《テーマ》

預かり保育

《背景》

21世紀を目前にして、戦後の教育の在り方が大きく問われるようになり、幼稚園と保育所との垣根も低くなるなど、いろいろなところで幼稚園を考え直さざるを得なくなってきた。預かり保育もその流れの中で、共働きの保護者にとって保育所しか選択できなかった時代から、幼稚園というものも選択の一つとしてクローズアップされてきた。

今まで行われてきた預かり保育がどのようなものであったのか、また親のニーズだけではなく、子どもにとって意義あるものとしての預かり保育はどうあるべきなのかについて検討していく必要が出てきた。

《目的》

預かり保育の意義を問い直す

《方法・取組み》

1. 先進的な保育現場見学報告

- ・羽根木プレイパーク ・安佐私立幼稚園センター延長保育施設
- ・学校法人初音学園 ・子育てサポートセンターPICCOLINO

2. 預かり保育アンケート調査

預かり保育の実態調査（平成11年3月実施）

3. 預かり保育をどう進めるか

- ・保育案は必要かについて検討していく
- ・子どもの側に立った預かり保育とは何かについて検討していく
- ・保育者のベーシックスタンス+年間プログラム案について検討していく
- ・保育者のベーシックスタンス+子どもが生活しやすいような援助について検討していく
- ・子どもがほっとできる居場所作りについて検討していく
- ・一人ひとりのリズムを大切にする保育環境について検討していく
- ・少人数で夢中になって遊ぶことができる環境について検討していく
- ・じっくりと遊び込める時間を保証するために必要なことについて検討していく
- ・自分の責任で遊べるような保育環境について検討していく
- ・「お残り」ではなく楽しいネーミングについて検討していく



《結果と考察・研究成果》

1. アンケート調査結果

432園に配布し、189園（43.8％）から回答があった。預かり保育の実施園は75％で142園、未実施園は25％、47園であった。未実施の理由としては「家庭の教育力を大事にしたい」（49％）、「ニーズがない」（34％）、「必要とは思いますが条件面で問題あり」（23％）であった。「今後の予定あり」は36％、「予定なし」は60％であった。

預かり保育の実施時期は、平成2年4月の幼稚園教育要領改正以前が58.5％で最も多い。始めた理由は「保護者からのニーズにこたえて」で、子どもの生活の変化へ対応するためということであった。

担当については、「担任のローテーション」が35％、「専任」が31％であった。場所は「専用の部屋」を設置しているのは39％で、「保育終了後の保育室」が51％であった。

2. 施設・運営面以外での預かり保育の問題点

〈子どもに関して〉

①子どもに対する担当保育者の人数の問題

子どもの人数が多くなると安全面で不安を覚える。

②担当保育者と子どもへの関わり方に対する問題

指示が通りにくい。関わりの少ない子どもに対しては、トラブル後のリカバリーが難しい。

③子ども一人ひとりの違いによる問題

預かり保育に慣れている子とそうでない子との経験差がある。異年齢児保育のため、すべての子どもの気持ちを満たせる保育、遊びの設定が難しい。

〈子ども以外に関して〉

①保護者が時間通りに迎えに来ない。

②急な発熱や怪我など緊急時に保護者に連絡がつかない。

③日々のお金の徴収が大変。

《24次プロジェクトに繋げるまとめと考察》

公園遊び、地域交流、ご近所付き合いなどが活発だった頃に比べ、現在はこのような事が減っている。その中で、預かり保育は地域社会で失われつつある、公園での子ども達の遊びなどの機能を果たしていると感じた。こうした環境があった頃と比べると、人と人との関わりが減り、子ども達は「家庭では親の背中」を、教育現場では「保育者の背中」を見て、また近隣などにおいても、身近な大人達の背中を見て育つことが少なくなったのではないだろうか。こうした間接的な教育は、子どもの記憶に残り、無意識に子ども達は身近な大人の行動や言動を真似し、これが思春期にも少なからず影響を与えていたのではないかと感じた。

乳幼児期は、生涯にわたる人間形成の基礎が培われる極めて重要な時期といえる。子ども達は、生活や遊びといった直接的・具体的な体験を通して、人として、社会の一員として、より良く生きるための基礎を獲得していく。そのため、この時期に経験しておかなければならないことを十分経験することは、将来、人として充実した生活を送るうえで不可欠であろう。しかし近年、少子化や

核家族化、都市化など社会の急激な変化を受けて、人々の価値観や生活様式が多様化しており、そうした変化の中で、人間関係が希薄化するなど、子どもの育ちをめぐる環境も変化し、その結果として子どもにとって必要な経験ができなくなっているのではないだろうか。こうした社会全体の変化を考慮したうえで、極めて重要とされる乳幼児期における教育・保育のあり方を再考してかなければいけないと考える。

学校法人 天王学園幼稚園

温 品 早 織





【第14次プロジェクト】 平成12年～13年

指導：常磐会短期大学教授 常磐会短期大学附属常磐会幼稚園園長 植 田 明

《テーマ》

子どもの側に立った3歳児保育を考える ー満3歳児就園を視野に入れてー

《背景》

- ・女性の社会進出などにより 早くから教育を受けさせたいという保護者が多くなってきた。
- ・少子化傾向から子育て支援として3歳児受け入れの幼稚園側の積極的な受け入れの姿勢が増えてきた。
- ・平成11年8月に文部省が満3歳児の就園を公表し、12年度から就園奨励費の支給を制度化した。

《目的》

1. 3歳児保育の在り方を子どもの立場から問い直す。
2. 3歳児に相応しい生活を明らかにし、指導計画の考え方を提案する。

《方法・取組み》

- ・改訂幼稚園教育要領を3歳児保育の視点から読み取り、実践交流のベース作りを行った。
- ・どの園でも行う行事の前後の姿を取り上げて、3歳児、満3歳児の発達を理解するための実践交流をした。
- ・3歳児保育及び満3歳児保育に対する保護者の意識やニーズ把握のための調査を実践し、結果に基づき、各園の特性、実態に基づく指導計画や保育方法を検討し、その意味や良さを理解した。

《結果と考察・研究成果》

○アンケート結果

満3歳児保育をするのであれば、保育時間、内容、形態などの研究を進め、3年保育の3歳児として保育を受けることとは異なる良さやその存在意義、必要性を積極的に保護者にアピールする必要がある。

少数意見だが、3歳児期は保護者が手元で子育てしたいという意見も見逃せない。

○3歳児保育はどうあるべきか……

- ・幼稚園は安心できる居場所である。
- ・自分からやろうとする時期ゆえに、ゆったりと待つ姿勢が保育者や保護者に必要である。
- ・保育者のあたたかい目による幼児理解と保育内容の洞察にかかっている。
- ・一人ひとりがその子らしさを出しながら自我を確立していく。
- ・早くから集団のまとまりを求めない。
- ・一人ひとりが自分の好きな遊びに浸りきる生活を保障する。

《24次プロジェクトに繋げるまとめと考察》

満3歳児保育となると3歳児よりさらなる配慮が必要である。子どもたちに全く負担がなく、精神力、体力ともに良い状態で生活できるよう、保育日数なども考えないといけない。また、保護者の協力がより必要である。

現代の保護者にとっても必要だと思う。昔は育児の相談を聞いてくれる人が身近にいたが、現在は相談者が幼稚園という人も多い。近所で遊ぶことが少なくなり、家族以外の人とかかわったり、我が子を客観的にみる機会があまりないため、幼稚園という集まりに保護者も参加することで、保護者の精神的な安定が得られると同時に子どもも安定すると思う。この幼児期に培われた人とのかわり方が、安定した思春期へつながると思う。

大阪商業大学附属幼稚園

浦田 綾





【第15次プロジェクト】 平成14年～15年

指導：大阪教育大学 教授 玉 置 哲 淳

《テーマ》

子どもに根ざした指導計画の創造的編成をめざして

ー子どもの観察から関係・活動をとらえることを通してー

《背景》

幼児を取り巻く様々な変化にどのように対応するかが問われてきた。こうした問題に対して、以下の3点の理由から、教育課程の再考という視点からアプローチする必要性が出てきた。

- ・子どもの孤立化傾向などの子どもの変化をどのように理解し、保育に取り入れていくかを検討する必要がある。
- ・幼稚園の社会的責任として教育課程の公開性、そしてその信頼性をどのように担保するかが問われてきた。
- ・何よりも、目の前にいる子ども達が本当に輝くためにはどのような保育を行うのか、このことを考えるべき。

《目的》

本研究の目的は、私立幼稚園における実践的な教育課程編成論の検討を行うことである。具体的には下記2点を検討する。

1. 教育課程の意義の再確認（保育における諸問題（特に現代的諸問題）を解決していくために必要）
2. 教育課程編成の問題点を整理し、実際に使える教育課程編成のための方法論（土台作り）の検討

《方法・取り組み》

- ・各園における教育課程の現状の検討
- ・教育課程編成のための方法論の検討
- ・教育課程編成における基礎的方法としての観察法についての検討
- ・子どもの遊び場面における観察に基づく教育課程編成方法論の実践（土台作り）

《結果と考察》

- ・保育者は目に見えない心や育ちを見る目を養う必要がある。発達は出来ないことが出来るようになることではあるが、内面的世界の充実や広がりでもあり、参加形態の変化でもある。できる・できないを超えた、目には見えないものをみる努力と、そうした世界を大事にする価値が必要となる。

- ・ねらいとは何か。ねらいとして設定している根拠とは何か。保育内容と発達に関連性を明確にする必要がある。
- ・遊びを通しての保育とは、どのようなことなのか。遊びの重要性ばかりを指摘され、具体的な内容は示されていない。“適切に”とあるだけで“なにが適切か”の基準はない。保育実践という具体的なレベルで議論し、追求していく必要がある。

《24次プロジェクトに繋げるまとめと考察》

実際に現場に立つ立場として、指導計画の在り方を少しはき違えていたところもあるように感じた。子どものための指導計画のはずが、自分のための指導計画になっているのではないか、また行事をこなすための指導計画でもあったかもしれないと感じた。時代の変化、親の変化、子どもの変化と様々なことが変わりゆく中で、本来あるべき根っこの部分を大事にした、子どものための保育計画が立てられていたかどうか疑問に感じる。このプロジェクトを通してこうした感想をいただいた。

自己中心的、思い通りにいかないとキレる、孤立してしまう、こうした特徴をもつ子どもが増えてきたことは実感している。しかし、次の時代を担う子どもたちは、逞しくそして人を思いやれる優しさ、人とのかかわる力などを身につけてほしいと願う。こうした保育者の願いや思いを、成長過程で最も大切な幼児期に土台として培うことが出来る保育や関わりが出来ているのか、常にそうした視点から自分の保育実践を反省することの重要性を再認識した。

その園の理念を土台にした保育計画を立てるには、このプロジェクトのように子どもの観察、各学年にあった指導計画の骨組み、反省と課題と段階を踏んで立てていかなければいけないと思う。しかし実際には、明日保育がある、もうすぐ行事が迫ってくるなど、目先のことでいっぱいになっているのが現実でもある。それでも、カリキュラム会議などで今の子どもたちの成長にあった保育、子ども達が“やってみたい”と好奇心が持てる保育“頑張った先にある達成感や充実感”が味わえる保育、自信へとつながる保育、成長に合わせて自分たちで解決したり乗り越えたりできる保育など出せばきりが無いほど沢山あるが、その時にあった保育内容を職員間で議論しながら保育を立てていくことの重要性を改めて感じた。

大阪愛徳幼稚園

永 岡 澄 子



【第16次プロジェクト】 平成16～17年

指導：神戸芸術工科大学 教授 花 田 佳 明

建築家 遠 藤 秀 平 等

《テーマ》

幼稚園建築を考える

《背 景》

人的環境についての議論は盛んに行われているのに比べ、物的環境の問題についての研究や議論は保育学会や建築業界でも十分になされていない。

《目 的》

幼稚園の物的環境の構成を建築そのものから考え直し、保育理念や建学の精神の中で研究する。

《方法・取組み》

- ・ 建築とは何か、子どもと建築、環境の諸問題について、講義等による基本理解
- ・ 事例研究
- ・ 幼稚園見学と検討

《結果と考察・研究成果》

- ・ 子どもが安心して生活できる環境作りには、理念に基づいた園舎や園庭、幼稚園の建築環境のイメージを持ち、保育者の保育観を設計に反映させる必要がある。
- ・ 幼稚園教育とは何か、その本質を理解した上で、園舎、園庭をイメージする。
- ・ 物的環境の果たす役割とは、子どもの遊びや活動を引き出すことである。人的環境（教師）の果たす役割とは、子どもが安心して生活でき、保護者支援もし、子どもと保護者の共育ちの場としての幼稚園作りをすることである。
- ・ 教育とは、簡潔にいうならば、育ちに必要な活動と学びを生み出す環境作りである。自然環境下では、子どもの活動が活性化し、結果的に教育効果を生み出すことが多い。しかし、どの園においても、そうした自然環境を求めることはできない。すると、自然環境をモデルとしながら、計画的に意図的に、教育効果をもたらす活動が生じる環境作りを行うことが重要となる。

《24次プロジェクトに繋げるまとめと考察》

安全な環境、家庭的な環境、社会的秩序性のある環境、これらは、人的、物的、自然物の調和があってはじめて構成されるものであろう。つまり、子どもが安心して生活できる環境とは、こうした調和に基づきつくり出されていると考えられる。

たとえば、子どもが人との豊かな関わりを持てるような環境作りを行おうとすれば、構成段階か

ら設計士と関わり、保育・教育について対話を重ねていくことにより、子どもが安心して生活できる環境を作ることができるのであろう。このように、理念に基づき、人と関わる場として、子どものスケールに合った環境の面でも適したものを作るという幼稚園建築が重要である。

又、子どもが安心して生活できる環境で、子ども、保育者、保護者それぞれの関わり合いが豊かになることは、結果として子どもの自尊感情を高めることに繋がっていくと思われる。こうした環境面への配慮を行いながら、思春期を見据えて、保育者がしっかりと子どもの気持ちを受け止め、共感し、それぞれの個性を認め、自己肯定感を育むことが重要であると考えます。

御幸幼稚園・さくらんぼ保育園

小 林 真由美





【第17次プロジェクト】 平成18年～19年

指導：京都教育大学教授 岩 田 純 一

《テーマ》

5歳児が幼稚園で生活する意味を問い直す

《背景》

「5歳児の義務教育化」が取り上げられたことを契機に改めて幼児教育の役割や意義を検証し、「5歳児が幼稚園で生活することの意味」を考えていく。

《目的》

本研究の目的は、5歳児の遊びや生活を通しての育ちや学びの姿を分析し、幼稚園で生活することの意味を検証することである。同時に、5歳児の成長の姿のみならず、3、4歳時の姿も明らかにしていく。

《方法・取組み》

エピソードから学びや育ちの考察を行う。

《結果と考察・研究成果》

幼稚園での育ちは3、4歳児の保育の積み重ねの連続性のなかに5歳児の育ちをしっかりと位置づけることで、そのように培われた幼児期の育ちこそが小学校に入ってから学びや、幼稚園とは違う集団やそれ以降の学びや発達にとっても大切な基盤となっていく。幼稚園の教育はそのような育ちへの見通しや目標を持った、保育者の自覚のもとに実践される必要がある。

幼稚園での5歳児の姿とは、3、4歳児での経験や積み重ねがあってこそその姿である。3歳児では個を大切にされ、気持ちにたくさん寄り添ってもらい、その中で安心して自己発揮をしていく。4歳児では友だちとのかかわりを深め、自己発揮と自己抑制をしながら相手との距離をはかっていく。そんな心の安定や友だちとのかかわりを経験し、5歳児では個よりも集団のなかでの自分の役割を果たそうとしたり、その中で存在することの喜びや責任感も育っていく。

日々起こる事象やケンカなどのトラブルも自分の気持ちをコントロールしようとしたり、自分たちで考えて問題を解決しようとする力がついたり、自分の思いを持って相手に伝えたり、相手の思いも受け入れることができていく。

《24次プロジェクトに繋げるまとめと考察》

人間形成の基盤となるといえるこの幼児期に子どもたちの心のなかにしっかりと「自己肯定感」を育てることが大切である。

3、4、5歳の育ちのなかで、ありのままの姿を認められ、受け入れられ、愛される経験が、

「自己肯定感」が育つ根となり、それがしっかりと心の根底にあることで他者のことを認められる、受け入れられる、愛せる心が育つと思う。

「～できるから好き」、「～だから駄目」と自分の価値や条件、他者との比較を計るのではなく、「そのままの自分でいいんだ」という心の安定があると、失敗しても壁があっても自分で乗り越えられ、次に進むことのできる心の強さや柔軟性、バランスが保たれていくのではないだろうか。

いずれ思春期を迎える幼児期の子どもたちに対して、保育者が大切にしないといけないことは、この生きる力となる「自己肯定感」を育てることだと思う。

穂積幼稚園

飯田 有 希





【第18次プロジェクト】 平成19年～20年

指導：聖和大学 教授 日 浦 直 美

《テーマ》

保護者との建設的なコミュニケーション

ー保育者には何が必要か＜保育者の立場から＞ー

《背景》

理不尽な要求を園や保育者に突きつける、いわゆるクレーマーといわれる人たちの存在や、軽度発達障害児の増加でより密度の濃いコミュニケーションが必要とされ、保育者が保護者との建設的なコミュニケーションを構築していくことの必要性は以前にも増して大きくなっている

《目的》

本研究の目的は、保護者とのより良いコミュニケーションを構築していくにあたり保育者に必要とされることを検討することである。

《方法・取り組み》

1. グループディスカッションと事例を通して考える

保育者には何が必要かということを保育者の立場から考え、求められていることを具体的に検討していく。

2. 質問紙調査の報告

どのような要望に対しての対応なのか、どの立場の保育者が対応しているか等、幼稚園の保護者対応の実態を把握する。

《結果と考察・研究成果》

- ・保育者の経験年数に関わらず保護者との関係作りにおいて、傾聴は心掛けていても自分も相手も大切にする（自他尊重）自己表現（アサーション）はできていないという傾向がみられた。
- ・保護者対応をはじめ、より良い関係を築くにあたり園内での役割分担が重要になってくる。
- ・当事者だけでなく、園内全体で情報を共有し合うことや園内での役割分担ができていれば、個々の保育者がある保護者との関係が悪化したとしても周りの者がフォローしてくれるという安心感が生まれ、保護者と対等な立場で対話に向かうことができる。

《24次プロジェクトに繋げるまとめと考察》

コミュニケーションを保護者とより良く築いていくためには、自分も相手も大切にできるアサーティブな自己表現をすることが重要だと考えられる。

しかし、そのアサーティブな考え方はすぐにできるものではなく、保護者と保育者との違いを



しっかりと意識化するとともに、保育者がアサーティブな自己表現の仕方を身につけることが必要だと思う。

まずは、自分も相手も大切にするために、自分自身が認められ、受け止めてもらい自信が持てるようになることが大前提ではないか。つまり、保育者自身の自己肯定感が重要になると考える。

そして、日常の保育においても、保護者とアサーティブなコミュニケーションを大切にしていくと同時に、子どもたちとの関わりの中で一人一人の思いや話などにしっかりと耳を傾け、受け止めて、子どもの自己肯定感を育てていくようにしていきたい。

庄内こどもの杜幼稚園

辻 佳奈子



【第19次プロジェクト】 平成20～21年

指導：京都教育大学 教授 岩 田 純 一

《テーマ》

「聞く」「話す」ことからコミュニケーションへ ―子どもの発達と言葉の学び―

《背景》

平成20年3月に公示された小学校学習指導要領の総則に「児童の言語活動力を充実する」と明記された。小学校の子ども達の言語活動力を育む為には、その基礎的な部分を培う幼児期の言葉の育ちを充実させることが必要だと考えた。

《目的》

コミュニケーション場面に焦点を当て、幼稚園生活の中で言葉がどのように育っていくのかを研究し、言葉の育ちを支える保育者の役割を明らかにする。

《方法・取組み》

1. 子ども達が日々発している言葉や会話的なやりとりを集め、どのようなタイミングや状況・どのような意図や目的で使われているのかを分析する。
2. エピソードを3歳・4歳・5歳に分け、各学年の言葉の発達特徴を捉えながら、保育の課題や保育者の関わり方などを考察する。

《結果と考察・研究成果》

会話に必要な要素は、相手の話を聞き、それを理解することと、自分の思いを言葉で相手に話すことである。他者との生活を作っていくには、お互いの違いを伝え合い、その異質性を理解し合い、自他を繋いでいく為の言葉が必要である。たとえば、言い分を主張する、譲歩する、妥協するなど、仲間との関係を調整する言葉を育んでいくことである。また、イメージを共有する手立てとしての言葉なども大切になる。

《24次プロジェクトに繋げるまとめと考察》

集団社会において人と人が伝え合い、支え合いながら社会を形成していく為には、コミュニケーションが必要であり、自他を繋いでいく為の言葉が必要である。コミュニケーション能力を伸ばす為には、自分の心を理解して欲しいという気持ちと共に、それを表現する手段を何度も体験し、他者の心を理解できる「聞く力」も培っていかなければならない。したがって、幼稚園生活の中で保育者は、子どもにとって「自分のことを話したい相手」となり、個々の思いを受け止めながら丁寧に言葉を返していく存在であることが重要である。

保育者と子どもの一対一の会話を、他児を巻き込んだ形で繋ぎ、子ども同士の会話へと広げてい

くことで言葉やコミュニケーション能力が育っていくことから、人や物との関わり合いの豊かさがこのようなコミュニケーション能力を育み、思春期には自分を大切にする気持ちや、目の前の問題を解決していこうとする折れない心へと結びついていくのではないかと思う。

小松幼稚園

藤 川 幸 子





【第20次プロジェクト】 平成21年～22年

指導：関西学院大学 准教授 和田 薫

《テーマ》

発達が気になる子どもの理解と援助 ～コミュニケーション成立の方法論～

《背景》

平成17年に「発達障害者支援法」が学校教育法に位置づけられ、特殊教育から特別支援教育へと変わった。

《目的》

- ・発達障害、もしくはそれが疑われる子どもに対する正確な理解と適切な援助の在り方を検討する。
- ・その保護者に対しても正確な理解と適切な援助の在り方を検討する。
- ・発達障害をもつ子どもとその保護者に対する、幼稚園全体の支援体制の在り方について検討する。

《方法・取組み》

- ・方法：①事例研究 ②エピソード分析

・内容

発達障害とは何か・特別支援教育についての基礎概念理解

困った子・変わった子の具体的な問題点

保護者との関係づくりの具体的方法

職員が共通理解するための研修の在り方

保育教材としての支援グッズの活用法

専門機関との連携の在り方

個別カリキュラムの作成について

《結果と考察・研究成果》

「困った行動」として捉えられていた行動が、実は子どもの「困っていた行動」である、という子どもの視点に立ち保育を省みたとき、子どもの姿が見え、保護者の姿が見えてくる。すると、どのように支援すればよいのかというアイデアが生まれ、効果的な援助法や教材が試行錯誤の中から生まれてくる。

《24次プロジェクトに繋げるまとめと考察》

子どもの特性に応じたかかわり方や支援をし、人とのネットワークを如何にしてつなげていくかが、保育者が果たすべき役割として重要なことと思われる。子どもと担任からはじまり、子どもと先生たちのネットワーク、同じクラスの子ども同士のネットワーク、他のクラスとの年齢を超えたネットワーク、そうした他者との関係の広がりや深さといった豊かさが発達の原動力となっている。

これも、障がいの有無にかかわらず重要なことと思われる。同時に、これは子どもだけの問題ではなく、保護者も同様であり、幼稚園においていかに豊かな人との関係を作れるかが、保護者の発達の原動力となり、保護者が育っていくことで思春期の問題を子どもと共に乗り越えることができると思われる。

大阪ひがし幼稚園

喜屋武 春 菜





【第21次プロジェクト】 平成23年～24年

指導：関西国際大学 准教授 瀧 川 光 治

《テーマ》

子どもの“不思議”の世界を育む ―保育の中の科学遊び―

《背景》

一部の幼稚園を除き、あまり科学遊びなどがテーマに取組まれることはなかった。

《目的》

本研究の目的は下記2点である。

1. 科学する心とはどのようなものを明確にする。
2. 科学する心を育てる保育内容を考える。

《方法・取組み》

・方法：事例研究

・取組内容

- ①事例から「科学する心の読み取り」を中心に検討する
- ②「転がすあそび」をテーマに、科学する心の発達的变化をとらえる
- ③多様な実践事例を検討する

《結果と考察・研究成果》

- ①事例を「科学する心の読み取り」を中心に検討した。科学する心とは、子どもが感じている疑問＋行動的特徴のこと。
- ②「転がすあそび」をテーマに、科学する心の発達的变化をとらえた。その結果、下記の知見が得られた。
 - 3歳児：転がすあそびを楽しむ。遊んでいくうちに、多くの気づきが生まれる。繰り返し行動が重要となる。
 - 4歳児：疑問が意識化され、目的意識を持って遊ぶことができる。友達とイメージや気づきを共有することができるようになる。試し行動が見られるようになる。
 - 5歳児：深い探求が可能となる。疑問や気づきから、活動を発展させることができる。ねらいや目的を共有でき、共同的な活動が出来る。友達と一緒に繰り返し、試していく中で、追求・探求していくことができるようになる。
- ③多様な実践事例の検討
 - ・子どもの科学する心を読み取るための着眼点：
何度も何度も繰り返し試す・試行錯誤する・疑問に感じている・問題が発生している・「もっとしたい」という意欲・やりとり・協力、こうした行動に着目していく。

・科学する心を育てる保育の中で大事にしたいこと：

センス・オブ・ワンダーを育てる・問題解決の過程・問題解決の過程で知識や概念を獲得する・問題解決の過程を表現する・共同的関係や対話、こうした行動を大事することによって科学する心が育まれていく。

④ 考 察

子どもが好奇心を持って何かに取り組んでいるとき、その対象に夢中になっている子どもの姿がある。このような姿から、子どもたちの「？」や「！」すなわち、科学する心を捉えていく必要がある。

「科学する心を育てる保育」に取り組むことは、『学校教育法』や『幼稚園教育要領』に示されている「思考力の芽生え」「自ら考えようとする気持ち」を育てることにつながり、それを通して物の性質等に対する感覚を豊かにすることになる。

《24次プロジェクトに繋げるまとめと考察》

幼稚園における教育目標の中心は心情・意欲・態度を育てるのであって、行動的な結果を求めるものではない。したがって、心情・意欲・態度を育むことを、幼稚園での具体的な活動としてどのように捉えていくのかが問われていくことになり、そうした範囲内で何を大事にするのかが、各幼稚園における教育の独自性となってくる。いずれにせよ、行動の結果ではなく、心情・意欲・態度を育む営みそのものが、思春期の困難に立ち向かう大きな力になると考える。

みくにひじり幼稚園

安 達 祐 一





第3章 まとめ

平成に入ってから大阪府私立幼稚園連盟が取り組んできた、第9次プロジェクトから第21次プロジェクトの研究内容を振り返ってみた。その結果、平成に入り30年近くがたつが、幼児教育を取り巻く課題そのものに大きな変化はないように思われた。

大きな研究のテーマとしては、平成元年の幼稚園教育要領の改訂で保育のとらえ方が大きく変わったことから、子ども主体の保育の在り方について検討していくことである。これに関しては、保育理念としての問題を確認しながら、それを具体的な保育実践としてどのように実現していくのかについての議論が現在も継続している。

もう1つの研究テーマの大きな流れは、保護者の問題である。保護者支援の在り方、保護者をどのように保育に巻き込むのかといった、保護者の育ちを視野に入れた研究が平成元年以降の特徴として見られる。幼児教育の対象は幼児だけではなく、保護者と共に幼児をとらえていく視点が必須のものとなったといえる。

上記2点に共通する問題として、人と人のかかわりあいの問題がその基底にあると思われる。子ども同士においても、子どもと保育者とのかかわりあいにおいても、また、保護者と子ども、保護者同士、保護者と保育者とのかかわりあいにおいても、以前とは確実に変化しているように思われる。具体的に何が変化してきたのかは本研究では見いだすことができなかったが、以前であれば当たり前に進められていたことがそうではなくなってしまう、そうしたことが要因となり、保育現場に戸惑いが生じているように思われる。

したがって、保育における人と人のかかわりあいの実態を丁寧にとらえ、保育の主人公である「子ども」「保育者」「保護者」という、この3者の現状をその関係性も含めて把握していく必要があると思われる。そして、そもそも幼稚園とは子どもも保護者も、保育者もすべての人がともに育つ場所であることから考えると、幼稚園における人と人のかかわりあいのあるべき姿を追求していく必要があると思われる。そうして得られた知見に基づき、思春期を見据えての長期的視点から幼児教育の在り方を再考していくことが、今求められている重要な課題と思われる。

【これまでの研究プロジェクトから見出された重要課題について（資料）】

〈保護者対応〉

- ・ 親の気持ちを受け止める。親の思っていることを幼稚園が把握し、親と対話できる関係を作る必要性。

〈人と人のかかわりあい〉

- ・ 自己肯定感

自分も相手も大切にするには、まず自分自身が認められ、受け止めてもらい自信を持てるようにする。

- ・ 自他尊重（アサーション）

自己主張ばかりでもダメ、服従ばかりでもダメ、私は自分とは異なる他者といかにかわりあい、双方の主張をどのように調整していくのか。

自己表現の3つのタイプ（参考）

- ①非主張的な自己表現…相手は大切にしますが、自分は大切にしない《引っ込み思案、卑屈》
- ②アサーティブな自己表現…自分も相手も大切にする《正直、素直、自他尊重》
- ③攻撃的な自己表現…自分は大切にしますが、相手を大切にしない《自分本位、他者否定的》

・聞く、話すから対話へ

保育者と子どもの一対一の対話を、他児を巻き込んだ形で繋ぎ、子ども同士の対話へと広げていくことで言葉やコミュニケーション能力が育っていく。

〈自由の中で自主、自律できるセルフコントロールの力をつける〉

〈自ら考えようとする気持ち 遊びに対する内的活動として、心情・意欲・態度を育む〉

〈地域で子どもを育てるといふ発想の大切さを考える〉

- ・思春期での問題点がすでに幼児期に表れている。そしてその要因となっている家庭環境・社会環境が未だに改善が見られない。こうした要因が子どもの育ちにおける大きな壁になっている。

家庭…ココロよりモノ的環境の豊かさを優先
 テレビを始めとする情報の氾濫
 子どもの内的世界を尊重する姿勢の欠如
 社会…機械的・人工的な社会体験の増加
 効率主義・成果主義社会への過剰適応
 遊び場の欠落

子どもの

- ・心的安定 ・自発性
- ・自分や他人を大切に思う心
- これらを育て損なっている



第Ⅱ部

思春期から幼児教育を問い直す 事例研究

第1章 問題と目的・方法

第1節 問題

幼稚園における保育は、幼稚園教育要領に則り、卒園までのスパンのなかで目的や目標を立て、これに基づき展開していくものである。しかし、ここで設定される目的や目標は、卒園時に完成されるものではなく、生涯発達という長期的視点に基づき設定されるべきものであろう。そして、設定された目的や目標に向けた日々の保育内容も、長期的視点に基づき計画されるべきものであろう。今あらためて、こうしたことを確認していく必要があると思われる。

というのは、今、幼稚園で過ごしている子どもたちもやがて思春期を迎えることになり、現代的な諸問題、例えばいじめや不登校等の問題に直面していくことになる。この時、いかにすればそのような事態に陥らずに過ごすことができるのであろうか。あるいは、そうした事態に巻き込まれても、しなやかさをもって立ち向かい、問題を克服し、自らの育ちの糧にできるようになっていくにはどうすればよいのだろうか。そうした豊かな思春期を送ることを視野に入れると、保育にはいったい何が問われていくことになるのであろうか。幼児期の育ちで重要になるものは何なのであろうか。子どもの育ちのみならず、周辺の環境を含めて考えていく必要があろう。

このように、生涯発達という長期的視点に立った保育と、卒園時までを想定して行われる保育とでは、子ども理解のあり方も、保育内容に対するとらえ方も異なってくると考えられる。思春期を中心として生じる様々な問題がクローズアップされ、青年期の育ちが問われてから久しい。また、近年は子どもの保護者、つまり大人の育ちも問われてきている。こうした現状を鑑みれば、長期的視点に基づき保育を考えていくことは大変重要なことと思われる。

また、第Ⅰ部においてみてきた通り、平成元年以降の大阪府私立幼稚園連盟における研究プロジェクトの大きな研究の流れとしては、①子ども主体の保育の在り方と、②保護者の問題である。この2点ともに、卒園時までという短期的視点で取り組んでも、効果的な保育を考えていくことは大変難しい。しかし、生涯発達という長期的視点を持つことによって、効果的な保育を実践レベルで検討していくことが可能になるとと思われる。

保育における人と人のかかわりあいの実態を丁寧にとらえ、保育の主人公である「子ども」「保育者」「保護者」という、この3者の現状をその関係性も含めて把握していく必要があると思われる。そして、そもそも幼稚園とは子どもも保育者も保護者も、すべての人がともに育つ場所であることから考えると、幼稚園における人と人のかかわりあいのあるべき姿を追求していく必要があると思われる。

本研究の第Ⅱ部ではこうした問題意識に基づき、思春期までの育ちを視野に入れた保育の在り方について検討していくことにする。

第2節 目的

本研究の目的は以下のとおりである。「人と人のかかわりあい」を主たる研究対象とし、子どもたちが思春期を迎え、いじめ等の厄介な問題に直面したときにしなやかに対応していける、そうした子どもに育つには、幼児教育は何を大事にすべきなのか、教育とはどのようなことをする営みなのかについて、長期的な視点から再考していく。



第3節 方法

思春期を視野に入れ、長期的展望を持った保育の在り方を考えるために、幼児期における人間関係の在り方とその支援に焦点を当て研究を進めていく。

具体的には、事例研究を行った。幼稚園における人と人とのかかわりあいを「子どもと子ども」、「子どもと保護者」、「保育者と保護者」の3つに分け、それぞれの事例について検討した。



第2章 事例研究

第1節 子どもと子どものかかわりあいを中心として

- 1 A児の遊びの中に見る人との関わりの変化 双百合幼稚園 宗 千 景
- 2 一人一人の育ちに合った保育により自信へとつなげていく たちばな幼稚園 福 田 恵美子
- 3 子ども同士の関わりからうまれてくる 気持ちの変化 大阪商業大学附属幼稚園 浦 田 綾
- 4 話し合いの場面において、子どもはどのような人間関係を培えるのか？ 小松幼稚園 藤 川 幸 子



【A児の遊びの中に見る人との関わりの変化】

《対象児》

A児（年少～年中男児）

《背 景》

- ・ 児童養護施設より数人の子どもと共にバス通園
- ・ 乳児期より施設入所
- ・ 言語の発達、手先の発達に若干の幼さが見られる

《エピソード》

年少時の1～2学期はほとんどひとり遊びで、クラス内では保育者に関わるだけで毎日をすごしていた。ふれあい遊びなどには恥ずかしがる様子で参加せず、様々な声掛けによる促しにも抵抗して寝転がってしまう。

室内ではままごとコーナーで「ごはんやさん」になりきって保育者にごはんを運んでくる遊びを繰り返している。ところが3学期になると友達に話しかけられて嬉しそうに会話したり、一緒にパズルをするなど他児との関わりが見られるようになった。それと同時にふれあい遊びにも抵抗なく参加するようになった。動きが緩慢で物事の理解にも多少時間を要する本児の様子からは、園での活動に積極性は感じられないものの、遊びや友達との関わりには楽しさを感じているように見えた。

年中組に進級すると、スポンジプールやダンボール遊びなど簡潔でダイナミックな遊びに喜んで熱中し、その中で他児と関わりながら遊ぶ姿が多くなった。ふれあい遊びや行事にも喜んで参加し力を発揮するようになった。ままごとコーナーでは、相変わらず「ごはんやさん」を一人でしていた。あるとき、隣で友達が「家族ごっこ」をしていたので、保育者が出来たごはんをお友達に「いかがですかー、おいしいですよー」っておすすめしてみたらと促すと、恥ずかしそうに小声で売りに行った。しかし、他児は気づいてくれず反応が返ってこなかった。すると、すぐあきらめてひとり遊びに戻ってしまった。他児からの働きかけには喜んで応じるし、自分が嫌なことに対する拒否や抵抗はしっかりできている。しかし、自分からは積極的な働きかけをしない傾向は続いている。

《考 察》

本園におけるこれまでの事例では本児に限らず、児童養護施設から通う年少児にはひとり遊び中心で一斉活動に参加しない場面が多く見られ、行事や参観などの通常保育でない雰囲気の中では固まってしまう、という共通する特徴がみられたので検証の必要性を感じていた。

こうした行動特徴の要因として、乳児期からの集団生活による影響や、愛情を求めて甘えたり、試したりしている可能性も考えられた。しかし、今回A児を長期に渡って観察することで、子ども同士の関わりについて多角的に捉える重要性を学んだ。

A児は家に帰っても大人数の子どもと共に生活しており、嫌でも子ども同士の関係の中で折り合っていかなければならない。そうしたことから考えると、少なくとも年少時のA児にとって幼稚園は

“生活の場”から離れた“遊びの場”として存在したのではないだろうか。すると、幼稚園では自分の好きなことを落ち着いてゆっくりしたいという気持ちからひとり遊びを楽しんでいた、という見方もできるのではないだろうか。

年中組になると、成長と共に自分と他児の環境の違いに気付き始め、拒絶されることへの不安を感じたり、他児との経験の違いから、自分の言動に自信が持てない故の距離の取り方をしているかもしれない。しかし周囲に受け入れられているという安心感を得てきていることから、集団活動にも喜びと期待を持てるようになったと推測される。

このプロジェクトを通して、子どもが思春期において問題に直面した時、問題解決のためのしなやかな発想の土台となるものの一つは「想像力」であると感じた。様々な環境や相手の気持ちへの想像力は、園での同年代の子ども同士の関わりも面倒がらずに経験し、五感を使って自発的に遊ぶ中で養われるものであり、それと同時に周辺の人々の愛情あふれる関わりで得る自己肯定感や自尊心が、より良いしなやかさを育てると確信できた。

双百合幼稚園

宗 千 景





【一人一人の育ちに合った保育により自信へとつなげていく】

《対象児》

S児（年長男児）

《背 景》

- ・2年保育で入園。家族構成は父・母・姉の4人。
- ・経験の不足が感じられ、何をするのも自信がない様子で、入園当初はごく簡単な身の回りの支度も「できない」と泣きそうに訴えに来ることが多かった。特に制作に対して苦手意識があり、制作活動をする予定を伝えると、前日の晩は不安で泣いたりすることが母親からの連絡で何度か聞かれた。
- ・年中時の後半で、A児・B児（ともに女児）と仲良くなり遊べるようになってきたが、相手に対して自分の思いをなかなか伝えられないところがあり、A児・B児に仕切られていることが多く、姉と弟のような関係である。

《エピソード》

全員で同じ物を折り紙で作り制作帳に貼る、という活動が月に1度程度カリキュラムにあり、例年行ってきたが、今年度は形を少し変えてみた。折る物を、難易度を少しずつ段階分けして3種類用意し、どれを折りたいか自分で選ぶ、という方式にした。年長クラスは3クラスあるので、Aを折りたい人は○組、Bを折りたい人は△組・・・と部屋を移動し、他クラスの友達とも交流して折り紙制作に取り組むという形である。

S児はこの「制作帳」の活動が今まで大の苦手であったが、自分で作る物を選ぶ、ということになり少し前向きに取り組めるようになってきた。普段はA児・B児に頼りがちなS児であるが、折る物は2人にとらわれず、自分の意思で一番易しそうなものを選び、部屋を移動していった。他クラスの友達に混じり、担任以外の保育者に折り方を教えてもらうことになるが、泣くこともなく頑張って取り組んでいた。自分に合ったレベルの物を自分の意思で選んで作り上げる経験は、苦手意識の克服へとつながっていったようだ。

S児はその後、夏休みに家で練習した「縄跳び」が得意になり、何度も「先生、数えて～」と自ら言いに来るようになった。縄跳びに関しては10回跳べたら○色のテープ、20回跳べたら△色のテープ、と色を決めて縄に貼り、それぞれが自分の目標を持ち、達成感を感じられるようにしている。S児は増えていくテープに満足気で、もっと跳べるようになりたい、という意欲が見られるようになった。S児に対して年下の子のように接していたA児・B児も、S児の頑張っている面を認め、見方を改めたようであった。

得意なものができたことや頑張ればできるという思いが生まれたことで、少しずつS児にチャレンジ精神が出てきた。苦手だった制作でも「もう1つ、作ってみる」など自分から進んでやろうとする姿が見られるようになった。

《考 察》

理解度や手先の器用さ、運動能力など個人差が大きい時期にあって、同じ課題に一斉に取り組む、というやり方は子どもたちに負担になっていたのではないだろうか。幅広く習熟度別に取り組める活動を用意してこそ、一人一人の育ちを丁寧に見ていくことができ、子どもたちも自分で活動を選ぶことで意欲的に無理なく習得できる。そこから、出来るようになった達成感が生まれ、自信へと繋がっていくのではないかと考える。友達につられず自分で活動を選んだS児の行動を見ても、子どもたちはそのような形態を求めているのではないかと思った。

得られる達成感がより充実したものになることで、次へのチャレンジ精神が高まっていく。自己肯定感の基盤を幼児期に築いていくために、一人ひとりの育ちに合った幅広い環境を考えていきたい。

たちばな幼稚園

福田 恵美子





【子ども同士の関わりからうまれてくる 気持ちの変化】

《対象児》

S児（年長男児）

《背 景》

- ・ 3人兄弟の長男、妹2人
- ・ 3歳児………遅刻が多く、園では自分本位の行動が目立つ。
- ・ 4歳児………友だちとのトラブルが目立つ。注意をすると「ばか」「あほ」「どっかいけ」など暴言が出る。
- ・ 5歳児前期…友だちの輪の中に入りたいと思うようになるが、素直に言葉に出して伝えられず、入れてもらえないと手が出る。

《エピソード》

- ・ おみせやさんごっこ 看板作り 2月

おみせやさんごっこの看板作りで、子どもたちはダンボール箱にガムテープを格子状にはっていた。その一マスに一文字ずつ文字を書き、たとえば“おふろやさん”などと書いていた。しかし、S児は他児の貼ったガムテープをはがすなどして、他児とけんかになってばかりだった。また、飽きてしまったら、他のグループへ移って行った。

文字に興味が出てきていたS児。看板の文字が書きたいと、再び友達の輪の中に入ってきた。文字を書こうとするが、S児は文字が書けないので、友だちの真似をしながら書いていた。

作業を続けるなか、S児は一文字間違えてしまった。他児「あーあ」。S児「なんやねん、あほ!」。保育者はまたけんかが始まってしまうのかと思いながらみていると、「まって、同じ色のガムテープを上から貼って、もう一回かいたらええやん!」「ほんまや!まちがうことだってあるある!」「もっかい、かいてみー」。

この会話を聞いていたS児は顔を赤らめ、少したってからニコッと笑い、何も言葉は発しなかったが、もう一度書き始めた。これを機会にS児は徐々にではあるが、おみせやさんの準備では、友だちの話を受け入れ、他児と一緒に協力して参加できるようになった。

《考 察》

S児はいつも乱暴にするからと、友達の輪の中に入れてもらえなかったり、S児自身も素直に自分の思いを伝えられずにいた。しかし、



今回他児たちの優しさに触れ、言葉には出さなかったが、喜びにあふれたのだと思う。

今回、S児が友だちの言葉とことばの背景にある優しさを受け入れられたのは、4月から少しずつ友達から受け入れられ、人といふことの心地よさを経験してきたからこそだと思う。そして、自分の過去を振り返り、仲間とどのようにかかわればよいのかについて改めて考え直す機会となったのではないだろうか。

保育者は、このような子どもの気持ちに変化していく瞬間を大切にしていきたいと思う。しかし、その瞬間はいつ起きるのかわからない。偶然の出来事をきっかけにして起きるものなので、まずは子どもたちとの関わりを深め、信頼関係を築くことが大切なのではないかと思う。そしてそうした関係性に基づき、子どもの行動をしっかりと見つめていくことが大切なのだと思う。

今回の出来事は、友だちの優しい言葉がS児の気持ちを変えていったのだと思う。しかし、その前提には、保育者が子ども自身の性格や思い、気持ちを汲み取り、その子の良さをクラスに広めたり、思いを伝え合う機会を増やしたりと、互いにクラスの一員なんだという気持ちをもてる経験を企図している。こうした経験があるからこそ、子どもは精神的な安定感が得られ、互いの思いを受け入れられるようになり、その結果として仲間になれるのだと思う。思春期に同じような場面に直面したとしても、このような経験を積み重ねていくことによって、相手に優しく接することができるのだと思う。

大阪商業大学附属幼稚園

浦 田 綾



【話し合いの場面において、子どもはどのような人間関係を培えるのか？】

《対象児》

C児、D児（年長男児）

《背 景》

- ・運動会のクラス対抗リレーの順番を、子ども達で話し合って決めることになった。
- ・C児、D児ともに、幼稚園生活の中で以下の様子が見られる：
自分の思いが通らないと感情的になり、言葉で伝えることに未熟さが見られる。
気が逸れやすく、集中できる時間が短い為、相談することが苦手である。
動作が大きく遊び方も激しいので、普段からぶつかった、押された、など他児とよくトラブルになる。
友達と上手くいかないことが多く、コミュニケーションや仲間作りに課題がある。

《エピソード》

1回目の作戦会議では、運動神経が良いA児がアンカーがよいとB児が推薦するが、どのようにアンカーを決めるか意見を合わせるような雰囲気は生まれず、子ども達は好き勝手に話し始め、まとまる気配がなかった。決め方よりも、自分の意見を言うのに必死な様子を見て、「決め方は色々あるよ」と保育者から助言を行った。すると、アンカーはA児ではなく、足の速いB児に決まった。A児は悔しそうな表情で黙り、C児とD児は部屋の隅で泣いてふてくされていた。

2回目の作戦会議でも、保育者が話し合いの方向付けを行い、子ども達の意見をまとめる手助けが必要であった。その後「速い」「苦手」というキーワードが出てきた。話し合いの中で、E児が自分の思った通りに順番を決めていることに対し、保育者から「みんなはこれでいいの？」と投げ掛けてみることにした。すると「嫌だ」と不満を訴える子が出て、話し合いをやり直すことになった。結果、アンカーはA児に決まり、思いがかなわなかったC児とD児は大号泣してしまった。それを見た他児が、A児が選ばれた理由が納得できるよう、C児とD児に説明する姿が見られた。友達からの説得を受け、C児とD児もしぶしぶ納得することができた。

3回目の作戦会議では、リレーの相談をすると伝えた途端C児が怒り出した。C児はアンカーにこだわり、決め方に不満を持っていた。C児は「くじびきがいいねん！」と強引に周りの友達に訴えており、他児もC児の態度を見て仕方なく、くじびきに賛成した。すると、奇跡的にC児に当たりが出て、アンカーはC児に決まった。嬉しそうにはしゃいでいるC児を見て、一緒に喜び、声をかける子ども達の姿が見られた。

4回目の作戦会議では、C児は「僕はこないだアンカーしたから、何番でもいい」と初めて他児の意見も受け入れられる態度に変わった。D児は「僕はやってへんからやりたい！」と強く主張したが、前回のリレーの結果が最下位だったこともあり、「でも、また負けたらどうするん？速い人と遅い人をはさんだ方がいいで！」「みんなから選ばれるか、やってみたら？」などと言われ、投票の結果D児はアンカーになれなかった。この時期でも、まだ自分から意見を言えない子がいたが、

一方では聞き役に回る子も出てくるようになり、多くの子どもからクラス全体の視点に基づく現実的な作戦が出始め、クラスで勝つ為にはどうすれば良いか、意見をまとめられるようになってきた。D児も泣いたりふてくされたりすることが減り、話し合って決まった走順に理解を示すようになってきた。

運動会当日の結果は残念ながら2位であったが、「1位になれなくて悔しかったけど、みんなで頑張って2位になれたのが嬉しかった」とクラスで団結する満足感を味わっている子ども達の姿を見ることができた。

《考 察》

C児とD児は友達とのコミュニケーションが上手くいかず、話し合いの度に感情を抑えられなくなっていた。そうした場面でも、みんなから選ばれたのはなぜか、選ばれなかったのはなぜか、その子どもなりに考え、受け入れられるよう手助けを行い、保育者が筋道を決めるのではなく、その時の子ども達の気持ちを聞きながら話し合いができるようにしてきた。また、子ども達同士が気持ちを伝え合い、話し合えるクラスの雰囲気作りが大切であると考え、保育者の助言や見守り方が適切かどうか、ねらいを明確に持ち、保育の振り返りを行うよう心掛けてきた。クラスのみんで相談し、一緒に成功も失敗も経験しながら、その時の雰囲気や一人一人の思いを共有することで、新しい案を考えるきっかけになり、C児、D児ともに折り合いをつけながら他児と関わるできるようになってきたのではないかと思う。

相手に受け入れられることで「嬉しい」という気持ちになると同時に、相手を受け入れて優しく接することができるようになる。相手のことを考え、伝え方を工夫することができるようになる。友だちの考えを受け入れることで、新たな世界に気付いたり、視野が広がったりする。自分さえ良ければいいという思いから、クラスの友達のことでも考えられるようになる。など作戦会議を積み重ねることで、子ども達の関わり方に変化が見られた。この経験から、主体的に友達のことを考え、自分達で問題を解決しようとする姿勢が見られるようになったのではないかと考える。

幼児期の発達の特徴は、色々な能力が個別に発達していくのではなく、相互に関連していると言える。このことから考えても、子どもの自発的活動は、心身の調和の取れた発達の基礎を培う重要な学習であり、対人関係を育む為にはなくてはならない活動といえる。子どもが自ら考え、やってみようとする機会や環境を大人が奪ってしまうことのないよう、満足して遊べる時間や空間、仲間を保証できているかどうか、保育者は常に見つめ直す必要があると思う。子ども達が柔軟に思春期を乗り越えられるようになる為には、このような経験に必要な時間を惜しんではならないと感じた。

小松幼稚園

藤 川 幸 子



第2節 子どもと保護者のかかわりあいを中心として

- | | | | | |
|---|------------------|------------|----|-----|
| 1 | 子どもが求める愛着関係とは | 庄内こどもの杜幼稚園 | 辻 | 佳奈子 |
| 2 | 焦らず丁寧に育ちを見守る | たちばな幼稚園 | 福田 | 恵美子 |
| 3 | 心が満たされていない子どもの姿 | 茨木みのり幼稚園 | 花岡 | 美穂 |
| 4 | 母親の精神状態から見る子どもの姿 | みくにひじり幼稚園 | 奥村 | 綾 |



【子どもが求める愛着関係とは】

《対象児》

K児（年長女兒）

《背 景》

- ・ 思いや意見を他児に伝えられるところは育っているが、自分の思いを無理にでも通すところがある。
- ・ 誰にも負けたくない気持ちが見られると同時に、保護者が見に来る行事では自分のやりたいことがあれば断固として他児に譲れない姿がある。
- ・ 両親ともに仕事をしている。
- ・ 本児に対して両親からの期待が大きく、何をするに対しても「一番」が良いという考えが両親の中にあるようだ。しかし、一番でないと本児に怒るということもないようである。

《エピソード》

年少児のときから意見などは保育者や友達にしっかり伝えられるが、周りの友だちの話にはあまり耳を傾ける姿や興味を持つ事が少なかった。学年が上がるにつれ他児の話を聞こうとはせず、自分の意見、思いを通すことが増えてきた。

行事等において、本児は自分がやりたいと思えば毎回立候補する。このこと自体はいいことであるが、本児は何が何でも他児に譲らない。そのため、いつも最終的には友達が譲る形になってしまっていた。年長最後の運動会においても、ファンファーレをする役に対して希望者が何人かいたが、本児は絶対に譲らなかった。そして、これを機に少しずつ友達との関係性にも変化が見られ始め、本児が遊びに誘っても断られることができた。

この時点では、保育者はKちゃんが真に求めていることがはっきりとはわからなかった。Kちゃんの思いがわかったのは、運動会のクラス対抗リレーだった。リレーに対しての意気込みをクラス一人一人に聞いたところ、「みんなで力を合わせて1位になる」「力いっぱい走る」といった声がほとんどの中、Kちゃんは「1位になってママに見てほしい」と言っていたのである。Kちゃんは どうして他児に役割を譲れないのか。それは、このKちゃんの発言に象徴されているのではないかと感じた。Kちゃんは、保護者（特に母親）に見てほしいという気持ちがとても強くあった為、他児に役割を意地でも譲ろうとしない姿が見られたのではないだろうか。

《考 察》

本児の気持ちとして、挑戦してみたいと思う気持ち以上に、親が求めている事に応えよう、親に認めてもらおうとするところから、こういった姿が見られたのではないかとと思われる。

今は自分の気持ちを周りの友達が聞いてくれているが、今後受け入れてもらえなくなるケースが想定される。そうした将来のことを考慮すると、相手の気持ちを考える力が本児には必要と思われる。しかし、まずはKちゃん自身の気持ちを受け止めて、十分に満たしていく経験が必要なのでは

ないと思われる。つまり、家庭での保護者との愛着ある関わりが、Kちゃんにとって何よりも必要となってくるのではないだろうか。

Kちゃん自身の心が満たされた時、他児の話や意見を受け入れながら、自分の意見も言えるようになるのではないだろうか。また、そうなってほしいと願うばかりである。友達との関わりの中で、これからもぶつかることがあると思うが、最初は周りの力を借りながら、ゆくゆくは自分の力でその状況を乗り越えられるようになってほしいと思う。

Kちゃんは、今後も同じような事態を繰り返していくことになると思う。保育者は、Kちゃんの発達を期待しながら、根本である親との愛着関係に着目し、保護者に園での様子や保育者との関わりをこまめに伝えていきたいと思う。そして、保護者からも家庭での様子を聞いていきたい。このように、保護者と一緒に悩んで考えていける関係性を築いていきたい。

庄内こどもの杜幼稚園

辻 佳奈子





【焦らず丁寧に育ちを見守る】

《対象児》

A児（年長女兒）

《背 景》

- ・2年保育で入園。家族構成は両親・弟の4人。弟は年中時の年度末に生まれ、年長に進級してから1ヶ月間は母親が動けないので休園した。
- ・もともと人見知りがあり、慣れるのに時間がかかる性格で、年中時も家が恋しくて園を休むことが時折あった。
- ・母親は子どもの思いを尊重する方針で、無理矢理行かせることに抵抗があり、A児も要求を通せば受け入れてもらえる、と思っている様子もあった。

《エピソード》

年長に進級して5月より登園。始めは昨年度から仲よしだった友だちとも同じクラスだったこともあり元気に登園していたが、6月の半ばくらいから休みがちになり、7月はほぼ不登園の状態になった。

家庭と連絡を取ると、仲よしのB児（女兒）との関わりが親密になってきたが、しっかり者のB児に指図されることもあり、言い返せず苦痛なのが原因とのこと。だが、園に来たときの様子を見ると、B児がA児を引っ張るような場面はあるものの、自分からもB児に親しく接しており、一緒に遊びたいと思ったり、頼りになったりする存在はやはりB児であるように思われた。B児だけが原因でなく、弟が生まれたという家庭環境の変化など全般的な背景を考慮する必要性が感じられた。

園に来て少し経つと気持ちを切り替えて遊んだり活動に参加できたりするので、母親に「Aちゃんの力を信じて、とにかく通園バスに乗せてさえくれば、あとは保育者が何とかしますから」と声をかけたが、「家を出るのが大変で、大暴れするので」と結局根負けして休ませることが増えた。夏休み中のお泊まり保育も出発の時間ぎりぎりまで待ったが、直前になって不安になり嫌がったA児は結局参加することが出来なかった。母親は無理矢理に行かせることには抵抗があるものの、登園させていないことに罪悪感のようなものを感じ精神的に苦しんでいたようだ。

2学期になりキンダーカウンセラーとも相談して、母親と一緒に登園し、A児が軌道に乗る時間までいてもらうことを提案した。「それなら、行けるかもしれない」と親子とも喜び、登園できるようになった。母親は毎日弟を抱っこしながら、A児が「お母さん、もう帰っていいよ」と自分で言いにくるまで少し離れて見守ってくれていた。徐々に「もういいよ」と言う時間が短くなり、最近では園の門のところで「バイバイ」と別れることができるようになった。「バスで来てみようかな」とつぶやく姿も見られるようになり、2か月ほどしてバス登園もできるようになった。9月の1ヶ月間、欠席なしで登園できたことを家族にも褒められたA児は、自信がついてきた様子が見られ、その後も2学期間ずっと欠席なく登園することができた。

《考 察》

弟が生まれ気持ちが不安定になる、というありがちな背景での登園拒否だったのかもしれないが、何よりA児の気持ちを尊重し、自分自身で納得して登園できるまで、家庭・園が共通の意識を持ってスローステップで見守ったことが良かったのではないと思われる。今まで母親との離れ際に大泣きする子を、泣いている状態のまま保育者が半ば無理矢理引き取り、気持ちが落ち着くように見守る、というやり方もしていた。しかし、5才児ともなれば時間はかかるかもしれないが、気持ちのコントロールや行動の判断が自分である程度はできるようになっているのではないだろうか。そうだとすれば、自ら立ち上がれるまで焦らず見守る、という周りの大人たちの姿勢と協力体制が、子どもが自ら壁を乗り越えていく力を育む支えになるのかもしれない。

今回、家族と共に苦しかった壁を乗り越えられた経験はきっとA児の自信となり、今後にも生かされると信じたい。

たちばな幼稚園

福 田 恵美子





【心が満たされていない子どもの姿】

《対象児》

N児（年長女兒）

《背 景》

- ・思ったこと感じたことを突発的に発言してしまい、我慢ができないところがある。
- ・飽きやすく、なんでも一番になりたがる。
- ・自分が正しいと思い、他児の言葉を否定するところがある。
- ・相手の表情や、気持ちを読み取り、考えることが苦手である。
- ・母親は教育やしつけに対して厳しい。他者から批判されることを嫌がる。
- ・親は子どもに人に愛される思いやりのある子どもに育てて欲しいと願っている。

《エピソード》

1学期のクラスのグループ決めをする時、多数決でアイスクリームの味を選ぶことに決まった。しかし、N児は動物の名前がよいと思っており、いつまでも「うさぎがいいのに！うさぎがいいのに！」と言い、同じグループの子どもを困らせていた。そこで保育者が折り合いをつけられるよう言葉がけをした。保育者はN児に対して、他児の気持ちに気づき、時に我慢することも必要であることに気づいて欲しかった。保育者の言葉にN児は一旦納得したが、アイスクリームのなに味にするかという次の課題では自分の主張を押し通した。

また、N児は友だちと遊ぶとき、特定の友だちとばかり遊んでおり、そこへ「いれて」と別の友だちが来ても、仲間に入れようとしなかったことが多くみられた。

なぜN児は、自分の気持ちばかり押し通そうとし、自分の気持ちに折り合いがつけられず、自分本意な行動が目立ち、なんでも独占しようとするのだろうか。保育者は、N児への言葉がけや関わり方に悩むことが多かった。

保護者と懇談を重ねる中で分かったことは、保護者がN児のことをどのように思っているのか掴みきれず、N児はそんな保護者に対して心からの愛を感じられず、心が満たされていないのではないか、ということであった。

《考 察》

今は他児が折り合いをつけ、本児の気持ちを受け入れてくれているが、自分勝手な行動、発言ばかりしていると、他児に相手にされず、孤立してしまうのではないか。本児の近い将来像として、そんなことが心配される。保育者の思いとしては、独占することや自分の意見を通すことで自分の存在価値を示すのではなく、互いの気持ちが通じ合うことの喜びや、共感し心が満たされる経験を積み重ねていくことによって、クラスのなかで自分の存在が認められていることに気がついて欲しいということである。

N児の心の底には保護者に自分の存在を認めてほしいという欲求が強くあり、この満たされぬ欲

求を代理的に満たすために、何が何でも自分の思いを友だちに認めさせようとする姿になっているのではないだろうか。すると、本児に必要な環境や経験としては、本児の心を満たすことのできる経験、すなわち保護者から認められる経験が必要かと思われる。しかし本児は、保護者から愛され、心が満たされるという経験が乏しかったのではないかと推測される。

すぐに保護者と子どもの関係が良くなること、又保護者の子育て観や教育観を変えることは難しい。したがって、保育者にできることは、日頃から、本児の様子をこまめに伝え、保護者と保育者のより良い信頼関係を築くことであると思われる。そうすることにより、協力的な関係ができ、一緒に子どもの今の姿を捉え、必要な関わり合いを共に探ることができるようになるのではないか。

この事例研究により感じたこと、さらに思春期を見据えて保育を行ううえで大切なことは、幼児期において子どもが自分の真の欲求を満たすことができる経験をたくさん重ね、自分の存在を周囲から認められ、そうした経験に基づく嬉しさ、喜びを感じることはないだろうか。

学校法人茨木学園 茨木みのり幼稚園

花 岡 美 穂





【母親の精神状態から見る子どもの姿】

《対象児》

S児（年長男児）

《背 景》

- ・ 2歳児のとき隣接する保育園より入園
- ・ 保育園入園前より母親の精神状態不安定（本人より相談あり）
- ・ 母親は、幼稚園の行事などにあまり参加せず、家庭訪問、個人懇談なども父親が対応
- ・ 母親は、フルタイムで働き、本児は預かり保育を利用（18時まで預かり）
- ・ 本児が4歳児の時、妹が産まれる
- ・ 育児休暇中、月の半分ぐらい遅刻（妹を保育園に送って来る時間に登園）
- ・ 仕事復帰後も、遅刻したり、迎えの時間に遅れることがあった
- ・ 本児が年長の夏に、父親と離婚
- ・ 半年後に、母親は妊娠、再婚し、本児も一緒に他市へ引越した

《エピソード》

年少の頃の本児は、片付けをしなかったり、トイレに行くのが遅くなると、保育者に促されるが、その度に大声で、「パパに言うからな！」と逆上する事があった。

母親が迎えに来た時に、本児が、今までしていた遊びをすぐに止める事ができず、片付けに時間がかかると、「私は疲れているんです！早く準備をさせてください！」と保育者に怒り出し、園の玄関外で泣き出すことが度々あった。本児は、母親が怒り出した瞬間、静かに泣きながら身支度をしていた。本児は、母親の怒りが落ち着くよう「良い子」でいようとしていた。父親が迎えに来た時は、表情も柔らかで、ブロックで作った物を見せ楽しそうに話をする様子が見られた。このように保護者のどちらが迎えに来るかによって、本児の様子は異なっていた。

ある日、泣きながら登園し、「家にいたTさんを蹴って、母親に叱られた」と担任に打ち明けた。そのTさんは、時々家に来るお兄ちゃんということだったが、後に、母親の彼氏ということがわかった。その頃から、本児が幼稚園で、度々、Tさんと一緒に出かけた時の様子など話をするようになった。自分の気持ちを上手く表現はできないが、話を聞いて欲しい様子だった。

7月頃から父親と別居状態になったが、母親が園に迎えに来られない時は、今までと変わらずに父親が迎えに来ていた。また、週末には父親と過ごしていた。

年長の秋頃、特定の年下の友達に「よしてあげへん」「年上に逆らうな」などの発言を繰り返すようになった。そのことについて保育者にふれられると、自分の気持ちを上手く出せず、内に秘め、すぐに泣いてしまい、何も言えない状態になってしまっていた。

《考 察》

母親の精神状態の不安定さを小さい頃から見ている本児は、常に母親の様子を伺い、気遣いなが

ら育ってきたようだ。自分の感情を、母親の前では出せずにいることから、自分より弱い立場（年下）の者に対してきつくあたることが増えたのではないかと推測される。

園にいる間は、担任や預かり保育担当者が本児の話をよく聞き、認め、寄り添いといったかかわりに努めた。その結果、本児が本来持っている姿を引き出すことができるようになってきた。しかし、母親に、認めてもらう経験が少ないと思われる本児の気持ちに、母親自身が気づくことが何よりも大切なことと思われる。母親に自分の気持ちを認めてもらえ、自分の存在が認められていることを実感できる、そのような環境で育っていくことで、本児が本来持っている姿を、母親の前で出せるようになることを強く願うばかりである。また、保健センターとも連携を取り、見守ることも必要と思われたので、引越し先への引継ぎも徹底するよう依頼した。

みくにひじり幼稚園

奥 村 綾





第3節 保育者と保護者のかかわりあいを中心として

- 1 未就園児クラスでの親子の様子 関西女子短期大学附属幼稚園 岡 本 秀 美
- 2 今の保護者の特性に対して保育者はどう関わるのか せんりひじり幼稚園 小野寺 敦 子
- 3 親子の繋がり、人との繋がり 大阪商業大学附属幼稚園 築 地 典 子



【未就園児クラスでの親子の様子】

《対象児》

満2歳児 A児親子

《背 景》

- ・他児のように遊びにのれない。保護者以外には話そうとしない内弁慶である。
- ・保護者も周りの親子の様子ばかり見ているが、動かず周りに合わすことができない。

《エピソード》

未就園児プレクラス「ニコニコ」での親子の様子では、A児はまず周りの子どもたちのように、遊ぼうとしない。保育者が話しかけると、黙って聞いている。また問いかけに対する答えは、小さな声で保護者に耳打ちすることによってで、直接保育者へ返答することはできない。

保護者も周りの親子をただ見ているだけで、動こうとしない。しかし、A児の現状をよしと思っているわけではないし、A児が楽しそうにしていないうことに不安も感じているようだ。

そこで、保育者がA児親子に直接働きかけてみた。保育者はA児の保護者に対して「まず、お母さんが楽しんでくださいね、お母さんが楽しむと子どもも楽しめるようになりますよ。手遊びを覚えてぜひお家でもやってください。」など、助言してみた。すると、これをきっかけに、親子の表情が明るくなったりと、回を追うごとに少しずつ変化がみられるようになった。決して自発的な参加とは言えないが、それでも歌を聞いたり、徐々に保育にも参加できるようになり、A児が「ニコニコや先生が好き」と言うようになった。また、こうした家庭でのA児の様子を、保護者が報告してくれるようになってきた。

ある日、砂場遊びを楽しく終え、A児も含めみんなで片づけをしているときであった。何事もゆっくりであるA児がゆっくりとスコップを片付けているとき、B児がそのスコップをとってしまった。保護者は、なぜとられたのか理解できない様子で、B児に対して、それはA児のスコップで片づけをしているところなので取り上げてはいけないうと注意した。それを見ていた保育者は、A児のびっくりした気持ちを汲みとった後に、B児は取り上げたのではなく片づけを手伝ってくれたのだと説明した。すると、保護者もB児の行動を理解することができたようで、A児に対して「お友達になってねって言ってごらん」と声をかけていた。それから本親子は、少しずつではあるが、B児や他の方にも話しかけたり、遊んだりする行動が見られるようになった。そして何と言っても、保護者自身がA児との触れ合いが楽しくなり、一緒に遊ぶことを通して子どもをかわいいと思える余裕が出てきたようである。

《考 察》

人と接するきっかけをつかめないでいる保護者に、自分から進んで話しかけたり、行動したりするきっかけを作り、親子が自立して他の保護者と関わっていけるように働きかけることが必要になってきた。これは、決して簡単なことではなく、まずは保護者と信頼関係を築かなければならな

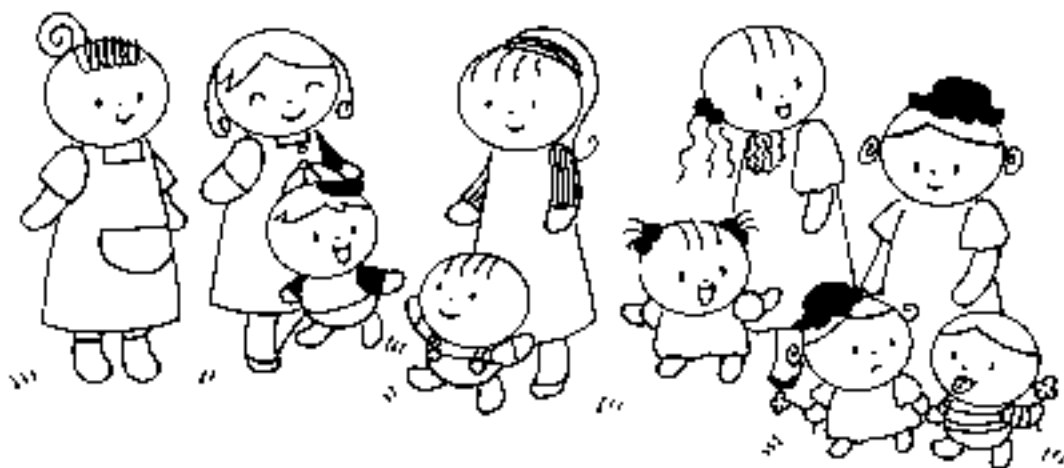
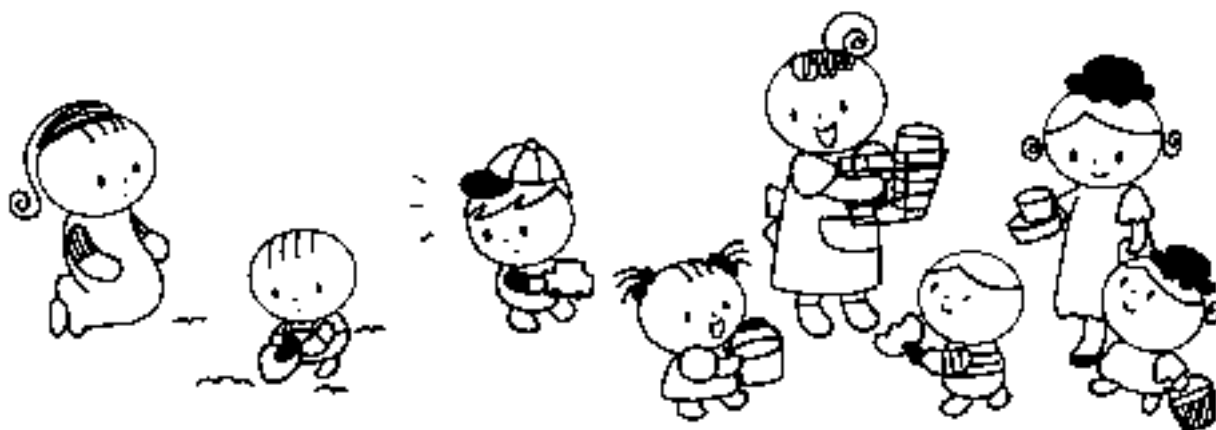
い。そうでなければ、保護者は保育者の言葉かけや働きかけを受け入れないのである。

幼児期の時こそ、親は子どもに対して、人と関わり合うことの大切さや楽しさを共に経験することで、あるいはモデルとなることによって、教えていくことが重要であると思われる。しかし、保護者自身が人とのかかわり経験が十分ではないままに大人になってしまっている。そうしたケースが増加しているように思う。したがって、対人経験が希薄な大人が親になった時、周囲とのかかわり方がわからず子どものモデルになれていないどころか、自分自身が大きく戸惑っているという事態が生じているのではないだろうか。

保育者は、こうした状態を認識し、信頼関係を築きながら、人の育ちにとって大切なことを保護者に伝えていくことが大切な役割と思う。これからこうしたケースは増加していくと思われることから、丁寧に取り組んでいかなければならない課題なのだと思う。

関西女子短期大学附属幼稚園

岡 本 秀 美





【今の保護者の特性に対して保育者はどう関わるのか】

《対象児》

M児（年少女児）とその母親

《背 景》

- ・ 家族構成は父、母、本児の3人家族。
- ・ 友だちと関わる姿は見られたがトラブルになることが多かった。家庭では英語のDVDを見せているとおとなしいので、手に負えなくなるとたびたび視聴させていた。
- ・ つめを切ることを嫌がり偏食も強いなど、とにかくやりにくい子どもだと母親は悩んでいた。
- ・ ASD（自閉症スペクトラム、アスペルガー症候群）の診断を受けている

《エピソード》

入園当初、M児は登園を渋り母子分離がなかなかできなかった。その一つの理由に集団での徒歩通園があった。知らない年長児と手をつなぎ、今まで歩いたことのない距離を歩く。M児にとって心身ともに辛かったようだ。母親も園のルールが守れないことや、毎朝行き渋り大泣きをする我が子に参っていた。

そこでしばらく自転車で送迎することを勧めてみた。するとM児は母親と離れられるようになり、迎えた時にはM児の笑顔が見られたことでやっと母親も元気を取り戻し、母子ともに徐々に園生活に慣れていった。母子共に見通しがつかないことに対してかなり不安な様子が見られたので、初めて経験することに関しては事前に声をかけたり、写真を見せたりするなど予め情報を入れるようにした。

その後も担任から小まめに連絡をとり、困っている事があれば時間を作りとにかく話を聞くようにした。母親にM児の園で楽しんでいる様子を伝え、その裏には母親の大変な苦労があることに理解を示し、それを労い母親の思いに受容と共感を繰り返し、絶対に否定することをしなかった。思い込みが激しく、子どもの行動をプラスにはなかなか見れず、我が子に対して大人に接するような姿の母親も、目の前の子どもの姿を保育者が解説し行動の意味を一緒に考える中で、母親の中の子ども像が少しずつ変化していくのを感じた。それと同時に悩みや心配事などを気軽に相談してくれる姿が見られるようになった。

《考 察》

年少とは子どもにとって初めての幼稚園。と同時に第一子の入園は母親にとっても初めての幼稚園なのである。子どもは母親の写し鏡であり、子どもの不安の要因には母親の心理状態が影響していることが多い。母親はM児にコミュニケーション能力をつけたい、そして欠落している部分があれば知りたいと、かなり焦っているようだった。自分の子育てに自信がないから常に不安がつきまとうのだろう。しかし自分の在り方を否定されたくない。自分の子育てを振り返ってみて、もし違う方法があったとしてもそれは認めたくない。そんな今の状況から何とか脱出したいため、母親は

クリニックを受診したようだ。つまり、診断名がほしかったのではないかと推測される。自分の子育てを否定されるのが嫌だったからではないかと推測されるのだ。この子の今の姿は、私の育て方の結果ではなく、この子の特性なのだと信じたかったのではないだろうか。

最近では母親のサポートが必要とされるケースが多い。同じ目線で子どものどんなところが今育とうとしているのか、その行動には子どものどんな気持ちが存在するのか、まずは子どもの声を聞き気持ちを受け止めていく。保育者が子どもと接していくとき、こうしたプロセスが重要になる。この子どもの育ちを見取るのと同様のプロセスが、保護者に対しても必要になってきていると思う。まずは受容、共感するところから始まる。間違えることがいけない事だと思う保護者に対して、子育てに正解などないことを伝え、悩んでいる保護者が素直に自分の助けてほしい気持ちを出せる関係づくりを構築することがまずは重要になる。そのために保育者は、保護者、子どもが共に育つ力を信じ、肯定的に見ていく力が求められるのではないだろうか。思春期という子どもの将来を見据えた上でも、こうした保育の在り方が大切なのではないかと考える。

せんりひじり幼稚園

小野寺 敦 子





【親子の繋がり、人との繋がり】

《対象児・保護者》

A児（年長男児）・母親

《背 景》

- ・父親・母親・年長A児・弟（2歳児）の4人家族
- ・電車通園、自宅近くの幼稚園には行きにくい理由があるようにうかがえた。
- ・近くに育児を手伝ってもらえる人はいない。

《エピソード》

〈A児の様子〉

入園当時（2年保育）から、自分が気に入った限られた遊びしかしようとしな。まわりの子どもが誘っても応じず、全く聞こえていないかのように無視をする場面もよく見られた。特に恐竜が好きで恐竜の人形を並べて遊んだり、恐竜の絵ばかり描いていたり、好きなものに対してのこだわりが強いように思えた。時には一日中、恐竜になりきって過ごす日もあった。友だちや保育者が恐竜について質問をすると、生き生きとした表情で答えて会話も弾むが、それ以外の話題になると全く無関心な態度になる。気が向くと友だちと遊びたいと思うこともあるようだが、自分の考えが通らないと、我慢できないですぐにトラブルが起きてしまう。

〈母親の様子と変化〉

入園当初、母親はA児の行動について伝えようとしても話題を避けるかのように「そうですか。」の返事しか返ってこなかった。しかし年長になり、友だちとのトラブルが多く目立つようになると、トラブルの原因には触れようとせず、友だちにされた事ばかりを気にして保育者に相談していた。保育者はまず、母親の気持ちに寄り添うように話を聞き、思いをすべて受け止め、母親との関係を築くことから始めた。すると、一方的で感情的に訴えていた母親の態度が徐々に穏やかになり、家でのA児の様子や心配に思っていることを話すようになってきた。保育者はその頃から幼稚園の様子や課題に思っていることを少しずつ母親に伝えるようにすると、それまで頑なだった母親の態度が保育者の意見を受け入れるようになってきた。A児に対しても、感情的に叱ったり、指示する言動が目立ったりしていたのが、少しずつ減ってきた。

〈A児の変化〉

A児の攻撃的な態度が和らぎ、友だちの話を聞こうとする態度が見られるようになってきた。すると、周りの子ども達もA児を認めるようになり、仲良く遊ぶ場面が増えてきた。

《考 察》

入園するまでA児の母親は、家族以外で心を許して相談する相手がいなかったようだ。その為、

悩みを抱えたまま誰にも言えず、頑なな態度をとるようになったのだろうと考えられる。しかし、保育者が母親の気持ちに寄り添い根気強く関わることで、母親の気持ちが和らぎ心の内を見せてくれるようになったと推測される。母親自身が周りの人に受け入れられ、認められたと実感すると、A児との関わり方にも余裕が出てきた。そうした母親自身の心理状態の変化とそれに伴う行動の結果として、A児の園内での行動が変化してきたのではないかとと思われる。

以上のことから考えると、この事例は以下のことを示すと思われる。まずは母親が保育者に受け入れられることによって、母親が自ら人と関わろうとし、周囲の人と肯定的なコミュニケーションがとれるようになっていった。つまり、心が安定してアサーティブな自己表現をするようになった。そのことがA児に大きな影響を与えたのだろうと考えられる。このように、保育者と保護者の親密で肯定的な関係性の構築が、子どもの育ちを導くといえる。

大阪商業大学附属幼稚園

築 地 典 子





第3章 事例研究のまとめ

第1節 子どもと子どものかわりあいを中心とした事例研究のまとめ

思春期を視野に入れ、長期的展望を持った保育の在り方を考えるために、幼児期における人間関係の在り方とその支援に焦点を当て事例研究を行った。事例は、幼稚園における人と人とのかわりあいを「子どもと子ども」、「子どもと保護者」、「保育者と保護者」の3つに分け、それぞれの事例について検討した。

子どもと子どものかわりあいを中心とした事例研究からみてきたことは、子どもの遊びには仲間同士における豊かなかわりあいが含まれており、子どもたちはそのなかで様々な力を培っていくということだ。したがって、大事なことは、毎日の保育における遊びをどのように計画していくかである。豊かな仲間関係が展開されるための仕掛け作り、環境整備をどうするかが問われていくことになる。

また、保育者が子どもをどのように見ていくのか、その視点が問われることになる。表面的な行動や「できる・できない」といった行動の結果に注目する限り、活動のプロセスやそこでの子どもの内的世界の揺れ動きや拡がりは見えてこない。したがって、日々の生活のなかで、様々な力を培っていく子どもの姿は見えてこないことになる。つまり、二人の保育者が同じ場所にいて、子どもたちに対して同じかわりあいをしたとしても、視点が異なれば、子どもの内的世界の育ちは見えてこないのである。この4つの事例研究に共通する視点は、子どもの活動のプロセスに焦点を当てていることと、そこでの子どもの内的世界に注目したことである。

卒園までに、という短期的な展望で保育を行おうとすれば「みんな卒園までに〇〇ができるように」というように行動の結果に着目しがちになる。しかし、長期的展望をもち保育を考えていこうとすると、保育者に余裕も生まれ、子どもの活動のプロセスや内的世界に注目できていくのだと思われる。

第2節 子どもと保護者のかわりあいを中心とした事例研究のまとめ

子どもと保護者のかわりあいを中心とした事例研究からみてきたことは、一見すると子どもが抱えていると見える課題は、実は保護者との関係性の中で生じた課題の可能性が高いということだ。ここで取り上げた4つの事例においては、なんでも1番になろうとするKちゃんも、登園できなくなってしまったAちゃんも、自分の気持ちばかりを押し通そうするNちゃんも、そして年下の子に対してきつく当たるS君も、それぞれの課題はその子どものものと思われがちなのだが、そうとは限らず、むしろ事例でみてきたように、その課題は保護者との関係性の中で生じているのである。つまり、課題や問題は、必ずしもその子どもの内面に実在するわけではないのである。

子どものかかえる課題が子どもの内面に実在するというよりも、保護者との関係性のなかで生じるとすれば、大変重要なポイントとなるのが保護者対応である。保育者が、いくら一生懸命子どもに働きかけても、保護者を含めて働きかけていかない限り問題は解決しないのである。したがって、子どもと保護者の関係に対して、保育者は一体何ができるのか、このことが問われていくことになる。このように考えていくと、「保護者支援」という視点よりも、「保護者も保育の対象」ととらえた方がよいのかもしれない。

幼児期の子どもの発達著しく比較的とらえやすいが、保護者の発達や肯定的な態度変化にはかなり長い時間が必要になる場合が多いと考えられる。したがって、保育者は長期的展望をもって保育を考えていく必要があるといえる。では具体的に、幼稚園は、そして保育者は、将来的に不安を抱えている子どもに対して、いったい何ができるのであろうか。特に、本研究における4つの事例中の3事例がそうであったように、幼稚園の3年間では保護者の子どもへの対応に肯定的変化が見られない、あるいは期待できない場合、いったい何ができるのであろうか。この問題は、今後大いに議論され、具体的な保育内容と個々に応じた対応を考えていかねばならない。しかし少なくとも今いえることは、こうした家庭環境にいる子どもたちだからこそ、幼稚園生活を大事にする必要があるということだ。そして、子どもと保護者が幼稚園で出会う大人、つまり保育者が子どもと保護者にとってのよいモデルである必要があるということだ。

第3節 保育者と保護者のかかわりあいを中心とした事例研究のまとめ

3事例とも、保育者が子どもと保護者を受け入れ、また子どもと保護者が保育者から受け入れられていることを実感していく様子がとらえられている。そして、子どもと保護者が幼稚園は自分たちの居場所であり、保育者は自分たちの味方であると思えるようになっていくことによって、それまで保護者と子どもの2人きりで閉じていた関係性が、他者へ開かれていく様子が丁寧にとらえられている。

保護者が育児において何らかの心配事のかかえており、不安が高い時、また保護者側に精神的にも物理的にも余裕がない場合は、子どもを守ることに必死になってしまい、子ども同士でも、保護者同士でも、あるいは保育者に対しても開かれず、関係性を閉じていくことになる。子どもと自分を守る自信がないとき、自分たちを守る唯一の手段は関係性を閉じることなのであろう。

したがって、保育者は根気強く、「私はあなた方親子の味方であり、あなたと一緒に子どもを守っていきますよ」というメッセージを送り続けるしかないと思われる。大人でも、厄介な状況乗り越えていくためには、仲間が必要になる。そうした意味において、保育者は専門職業人というよりも、保護者が知らない子どもの育ちを知る「仲間」であることが求められるのではないだろうか。そして、こうした関係からはじまり、保護者との信頼関係が構築された後に、保育者は子どもの育ちの現状と見通しに関しての情報を保護者にわかりやすく提供でき、さらには子どものあるべき育ちに向けてともに考えていくことができる専門職業人としてかかわっていく必要があると思われる。つまり、保護者の状態と、保育者と保護者との現在の関係性を踏まえて、より適切な関係性を構築、再構築していくことが保育者に求められるのだと思う。

第4節 思春期から幼児教育を問い直すことによって見えてくること

乳幼児期から思春期における発達過程をみていくと、思春期の特徴の1つは、第2次性徴によって心身のバランスが崩れてしまい、非常に不安定になることである。またこの時期に、自分の心の細かな動きに気づけるようになるが、それをことばに置き換えることができないので、やはり不安定になるのである。そして、自己内対話が進み、たとえば、心から必要と思っていなくても親友のようなふりをしている時、親友を装っている自分がいることに気付いているが、それを相手に素直に話してしまうと厄介なことになることもわかるようになる。このように、自分の内的世界に複数



の自分がいて、それぞれの立場からいろいろと考えることができるようになっていく。つまり、思春期とは、自分の内面に矛盾を抱えることができるようになるという発達的な特徴をもち、簡単にいうと容易に解決することができない悩みが増える時期なのである。

こうしたことが要因となり、思春期以降に様々な問題行動が生じていくと考えられている。いじめや不登校や非行の背景には、こうした発達的な特徴があるとされている。したがって、問題行動の要因は、問題行動を起こす特定の個人の特徴とは一概にいえないのである。そうではなく、思春期の発達的な特徴であるため、問題行動がどのような形態で表出するかは別として、誰にでも起こりうることを考えられる。

また、そもそも人の発達には人とのかかわりあいが必要で、その影響が非常に大きい。ところが、人はいつ誰と出会うかわからない。これは偶然であり、コントロールすることのできないものである。すると、人の発達とは予測不可能性を孕んでいるものといえるのである。すなわち、大変恵まれた環境で育った子どもでも、思春期には不安定になり、この時期に出会う人によって大きく揺さぶられることがあるのである。そうした意味では、人は常に危機に晒されながら生きていくことになり、トラブルを回避して生きていくことは不可能といえる。このように考えると、人が生きていくためのマニュアルはない。問題を起こさないための教育的方法もないのである。むしろ、最もやってはいけないことは、問題を起こさせないように教育することといえよう。それは、自主的・自発的な活動に大きな制限をかけることであるため、子どもが育つ機会を奪っていくことにつながる。

では、教育には何ができるのであろうか。教育によって子どもの何を育てていけばよいのだろうか。大事な発想は失敗しない生き方を探るのではなく、失敗や困難に陥ってもしなやかに立ち直り、その経験を学びに変え、育っていくことができることをめざすべきだということであろう。そして、そのために必要な育ちとして、以下の4点が考えられる：

- ①「私は私で大丈夫。なんにでもかかわることができる。」という自尊感情。
- ②「私はどのような私として生きていくのか」という自身の生き方を問える力。
- ③「私」という存在そのものを支える他者との出会い。つまり、失敗したときに、超えることのできない壁にぶち当たった時に、ぼろぼろの「私」を受け入れてくれる他者。ぼろぼろの「私」が帰れる場所。
- ④共に生きていく仲間関係の構築。

人の発達は、当たり前前の日常生活の繰り返しによって生じる。したがって、日常生活を通してこの4つの育ちを大事にしていく必要がある。

思春期を見据えた保育とは、上記4点をどのような保育内容の中でどのように培っていくのか、具体的に考えていくことといえよう。一つの方法は、面倒くさいことを丁寧に行っていく、ということ。必要な時間を惜しまずにかけていくということと思われる。そして、結果を求めるのではなく、心情・意欲・態度を育てることが重要な課題になると思われる。この幼児教育の基本は、今、この時代の日本だからこそ、大事にすべきものと思われる。

人の学びで大切なものは「志」といえる。自らの生に基づく「志」がなければ真に学ぶことはできないし、学ぶ意味を見いだすこともできない。どんなに豊かな知識をもっている、どんなに特殊な技能を獲得していても、土台に心情・意欲・態度がなければ、人としての「志」を創っていくことはできない。つまり、困難な状況乗り越えていくことはできないと思われる。困難な状況か

らしなやかに立ち直り、その経験を学びに変えて、再び歩きはじめる人の土台には豊かな心情・意欲・態度があると思われる。「楽しい・面白い」と感じ、「やってみたい」と思い、「真面目に・真剣に取り組んでいく」という心情・意欲・態度に基づく学びの積み重ねのなかで、人としての「志」が形作られていくのだと思われる。

困難な状況においても、その過程のなかで、学びを深め、やがてその状況からしなやかに立ち直り、育ちにつなげることができる、そうした人の育ちの土台作りが保育であり、それを支えるのが保育者の役割であると考えます。



第Ⅲ部

全体のまとめと今後の課題

第1章 全体のまとめと今後の課題

第1節 全体のまとめ

本研究会では就学前までの視点ではなく、青年期までを視野に入れ長期的視点に基づく保育の在り方について検討してきた。そして「人が生きていく上での課題とは何か」という視点から、幼児教育をとらえなおしてみた。人が生きていく上での重要な課題の一つとして「人とのかかわり」があげられる。本研究会は、これを主たる研究対象として幼児期に限定しない長期的視点から幼児教育を再考していった。つまり「人とのかかわり」を中心に検討していくことによって「子どもたちが思春期を迎え、いじめなどの厄介な問題に直面したときにしなやかに対応していける、そうした子どもに育つには幼稚園教育は何を大事にすべきなのか？どのような保育が重要になるのか？」こうした問題意識をもってこれまでのプロジェクトを見つめ直し、また、事例研究を積み重ねてきた。

今、幼稚園に通ってきている私たちの目の前にいる子どもが思春期を迎えたとき、どのような姿になっていてほしいと願うのか。それは、上記の通り、いじめなどの厄介な問題に直面したとしてもしなやかに対応していき、そうした経験も自らの育ちの糧にできるようになってほしいと願う。しかし、実際には「しなやかに対応する」ことはとても困難なことと思われ、すべての子どもに対して求めることはできないかもしれない。それでも、たとえ困難に立ち向かうことができなくても何とか耐えることができる、助けを求めることができる、ギリギリのところでは「違う、そうではない、やってはいけない」と軌道修正できる、そして何より「生きようとする、自らの生をまっとうしようとする」そうなっていてほしいと願う。

そうした自己を育んでいくために、幼児期において子どもの心の中に育ってほしいと願うことは、自己肯定感や自尊感情である。つまり、自分が愛され大切にされ、受け止めてもらうことで自分を価値ある存在と感じ、自分を信じ意欲的に生きていく事ができる感覚のことである。

これは目の前にいる子どもを見て欠点を直す、できないことをできるようにするという、結果に主眼を置いた保育の中では育たない。欠点を直そうとする、結果を求める保育では、しなやかに生きていこうとする自己がつぶされてしまう可能性の方が高いのではないだろうか。たとえば、大人が子どもに友達と仲良くするように求め、そのために必要な行動を教えていくと、子どもは友達と仲良くあそべるようになるかもしれない。しかし、たとえば保育者に褒められたいから行っているのであって、本当に仲よくすることの意味を理解して行動しているとは限らない。また、仲良くできない子どもがいた場合、その要因は子どもによって様々であり、本研究の事例にも見られた通り、たとえば保護者の子どもに対する無理解さ、あるいは夫婦間の問題、経済的な問題などの影響を受けたものである可能性もある。このような要因で仲良くできない子どもが、仲よくすることを求められると、その子どもは自分では解決しようのない課題を突き付けられ、課題を解決できない自分を突きつけられていくことになる。そうした生活を送るなかで、自己肯定感や自尊感情を育んでいくことは困難であろう。また考えてみれば、他者と仲良くするとは、大人にとっても困難な課題であり、これは人が生涯を通して向き合っていかなければならない課題である。決して幼児期に解決できるような課題ではないのである。

乳幼児期からできない課題を突き付けられ、できない自分を突き付けられ、自己肯定感や自尊感情を育むことができなかった子どもが思春期を迎えたとき、非社会的集団がありがたみの彼を受け



入れてくれたとしたらどうなるであろうか。あるいは、非社会的行動を行うことによってのみ自己の力を感じ、自己存在を確認することができたとしたらどうなるであろうか。幼稚園、小学校、中学校と、学校生活の中で大人が子どもに対して教育という名の下に求めてきたことは、彼らが苦手とする行動の結果であり、そこではプロセスは評価されない。そして、なぜ彼らがその課題が苦手なのか、大人は理解しようとしめない。もし教育や大人をそのように認識してしまった子どもが思春期に問題行動を繰り返すようになった時、彼らは彼らに対してしなやかに生きろという大人の話を素直に聞くことができるのであろうか。

本プロジェクトの事例研究でも見られた通り、たとえば家庭そのものに課題を抱えている場合、親子関係に課題を抱えている場合、夫婦間に課題を抱えている場合、そうした家庭で育つ子どもたちこそ、幼稚園生活を送るなかで自己肯定感や自尊感情を育んでいく必要があると思う。発達に遅れが見られる、仲間関係がなかなか築けない、そうした子どもたちこそ、幼稚園生活を送るなかで自己肯定感や自尊感情を育んでいく必要があると思う。気がつけば、家庭にも幼稚園にも、どこにも自己肯定感や自尊感情を育む場所がない、ということがないようにしなければならない。

そのためには、今、目の前にいる、できないことだらけで、不均質で、でこぼこな育ちをした子どもを認めることから始めなければならないと思う。しかし考えてみると、そもそも子どもは均質に育っていくことなどできないのではないだろうか。人の育ちは、子どもも大人も区別なく、常に不均質であり、できないことをかかえながら一歩ずつ前に進んでいくものだと思う。したがって、できないことだらけで、不均質で、でこぼこな育ちをしている保育者と、同じくできないことだらけで、不均質で、でこぼこな育ちをしている子どもが共に生きる、ここに原点があると思う。発達とは作り込むものではなく、先取りしていくものでもなく、他者と共に今できることを充実させていくことによってはじめて生じていくものではないだろうか。

このように考えれば、教育とは、個々異なる筋道で発達を遂げる子どもたちに対して、一人ひとりに違いがあることを当然のこととして認め、それぞれが自分らしく集団の中で生きていてよいことを保障する場作り、ということではないだろうか。そうだとすれば、まずは、大人に、保育者・教師側にそうした価値観と実際の場作り、環境作りが求められる。

第2節 今後の課題：教育に携わる者の課題

本プロジェクトの研究を通して、現代社会は親にも子にもとても生きづらい社会であり、その中で必死になってもがいている親子の姿が浮かび上がってきた。そして、この生きづらさから派生する問題が、幼児期においてはまだ顕在化することは少ないが、思春期になって様々な形で顕在化しているように思える。

この現状に対して、どのように向き合い、取組めばよいのだろうか。これは、今、教育に携わる者すべてに問われていることと思う。この問題はひょっとすると私たちには解けないのかもしれない。しかし、たとえ解けない問題だとしてもこの問いに取組むことが、保育者の専門性として求められているのだと思う。また、この問いに対して取組む姿勢や態度が、保育者のアイデンティティを形作るようになってくるのだと思う。

今、私たちに求められているのは、どのように問題解決していくかを考える前に、保育者間で、保護者と共に、あらゆる教育関係者と、様々な他者と手を携えてこの難題に立ち向かうことだと思



う。そして、一人ひとりの保育者が共に育っていくことが、子どもと保護者の育ちを導くことになるのだと思う。





第2章 24次プロジェクトに参加しての振り返り

小松幼稚園 藤 川 幸 子

初めてのことが多く、戸惑いや不安がたくさんありました。プロジェクトに参加する中でたくさんの事例に出会い、心の育ちやコミュニケーション力について色々な視点から学ぶことができました。また、他園の先生方と話し合い、情報交換をする場があることで、保育の取り組みや子どもへの理解、保護者対応などにも柔軟な考えを持つことができたと感じています。

みくにひじり幼稚園 安 達 祐 一

このプロジェクトチームの皆さんと一緒に、幼児教育が思春期に与える影響をいろいろな視点で研究できて、とても有意義な時間を共有させていただきました。私たちが普段行っている幼児教育が、どれだけ子どもの将来に影響を与えるのかを知ることができました。この研究で得た知識をこれからの自分に生かしていけるよう頑張ります。

みくにひじり幼稚園 奥 村 綾

このプロジェクトに参加させていただき、改めて幼児教育の重要性を再確認することができました。子ども達の将来を見据え、今後も、一人ひとりとの関わりを大切にしていきたいと思います。たくさんの園の先生方と交流することができ、良い刺激を受けました。ありがとうございました。

池田旭丘幼稚園 端 保 依 子

第24次のプロジェクトに参加し、違う園で活躍する先生方と話す時間はとても勉強になり、楽しい時間でした。本プロジェクトの研究テーマは、とても大きなもので、時折先が見えなくなる事もありましたが、須河内先生のご指導で最後まで進める事が出来ました。研究途中では、日頃の園での疑問点、問題点にも、違った方向からのアプローチ法や適切な助言を頂きました。今後の保育に活かしていきたいと思っています。長期にわたりご指導本当に有難うございました。

庄内こどもの杜幼稚園 辻 佳奈子

保育をしていく中でなかなか1人の子どもに焦点をあて、じっくりと考えていくことができませんでしたが、このプロジェクトを通して、その子どもが抱えている問題点に向き合い、解決策をみんなで考えることができ、私自身も保育者として成長する機会となりました。このプロジェクトで出会えた先生方と一緒に勉強していくことができたことを嬉しく思います。ありがとうございました。

せんりひじり幼稚園 小野寺 敦 子

「思春期から幼児教育を問い直す」という壮大なテーマに初めはかなり戸惑いがありましたが、研究を進めていくうちに自園でも大切にしている「自己肯定感」「人との関わり」が注目すべき点であることが明確になり、親子で生きづらいこの社会の中でやはりどう関わるかを考える前に、まず目の前にいる子どもや保護者がどんな人なのかを知ろうとすることが大切だと再認識できました。3年近くに渡る長期のプロジェクトで、多くの学びと出会いがありました。須河内先生をはじめ、諸先生方、どうもありがとうございました。

穂積幼稚園 飯 田 有 希

今回のテーマは私がずっと気になっていたことでした。私たちが携われるのはたった3年。でもこの幼児期の3年がすごく大切な時期だと保育者になって気付きました。今回のプロジェクトで、幼児期にいろんな人間関係の中でたくさんの経験をし、危機を乗り越える力や自己肯定感を育てることの大切さを再確認することができました。過去のプロジェクトの内容も興味深く、この仕事の大切さややりがいを感じることができました。この経験を活かし、今後も日々子どもたちと向き合っていきたいです。ありがとうございました。

茨木みのり幼稚園 花 岡 美 穂

このプロジェクトの「思春期から幼児期を問い直す」というテーマに惹かれ、思春期に不登校や引きこもり、いじめが増えているなか、幼児期の子どもたちに保育の視点から何かできることはないか、という思いで参加させて頂きました。各チームに分かれ、各園の子ども、保護者についてや、思春期を見据えた幼少期に大切にしたことを須河内先生、他の園の先生方と話し合うことで、発見がたくさんあり、とても有意義でかけがえのない時間となり大変勉強になりました。このプロジェクトチームで学んだことを忘れずに、これからの保育に活かしていきたいです。本当にありがとうございました。

天王学園幼稚園 温 品 早 織

長期に渡るプロジェクトに初めて参加し、そして「思春期から幼児教育を問い直す」という壮大なテーマに初めはかなり不安でした。でも、須河内先生、他園の先生方とディスカッションし、色々な視点からテーマを研究し進めて行く中で「人との関わり」など少しずつ壮大なテーマから見えてくるものがあり、発見・学ぶ事が沢山ありました。このプロジェクトで改めて幼児教育の大切さを再認識させてもらいました。本当にありがとうございました。

大阪愛徳幼稚園 永 岡 澄 子

初めてプロジェクトに参加させて頂き、それぞれ先生方の園での様子を聞くことが出来て良い刺激となりました。「思春期から幼児を問い直す」というテーマにそって過去の研究されたプロジェクト内容を再度見直し意見交換はとても勉強になりました。そして各園での気になる「子ども同士の関わり」「子どもと保護者」「保護者と保育者」とそれぞれのチームに分かれての研究はどのような関わりをしたかどのように導いていったか、そしてどうなったかと一連の道筋を研究し話を聞いたこと本当に良い経験となりました。先生方本当にありがとうございました。



たちばな幼稚園 福田 恵美子

昨今のニュースで心を締め付けられるような少年犯罪を目にする度に、人間の大切な幼児期に携わる私たちにできることは何なのだろう、と自問していました。幼児期に育ってほしい力とは何なのか、このプロジェクトチームで話し合ってきたことが一つ一つ蓄積され、目指していく方向が見えてきたように思います。舵をとってくださった須河内先生、頼りない私を支えてくれたメンバーの方々、2年間、ありがとうございました。

御幸幼稚園・さくらんぼ保育園 小林 真由美

今回、「思春期から幼児期を問い直す」プロジェクトに参加し、これまでのプロジェクトを振り返り、他園の先生方と課題を検討していく上で、学ぶと同時に新たな課題も出てきました。

子どもたちにとって安心できる環境を作ること、一人ひとりの価値観の違いを理解し、受け入れ、他者理解をする。他者、自分の気持ちを大切にすることは、多様性や違いを認める価値観、自尊感情を育成することにつながる重要なことだと再認識しました。これらを踏まえ、思春期を見据え、幼児教育を再考し、取り組んでいきたいと考えています。

須河内先生はじめ、諸先生方2年間どうもありがとうございました。

大阪ひがし幼稚園 喜屋武 春 菜

私の保育のやり方が、将来子どもたちにどのような影響を及ぼすのか気になり始めた頃、24次のプロジェクトが発足されました。「思春期から幼児教育を考える」というテーマはとても難しい題材でしたが、とても興味深いテーマでした。プロジェクトが始まると、多くの大ベテランの先生方に学ばせていただくことばかりで現場での子どもたちへの細やかな対応や新たな見解を聞くことができ、本当に勉強になりました。温かいご指導をありがとうございました。

大阪商業大学附属幼稚園 浦田 綾

今回のプロジェクトに参加させていただき、正直にいうと、初めは何を研究しているのだろうと「??」がたくさん出てきていました。しかし、この「??」が大事で、みんなで模索しながら考える機会が、とても意味のあるものだと感じました。そして、やはり幼児期に経験したものが、たくさん思春期へとつながることを確信しました。そんな大切な時期に自分自身が保育者としていることに改めて、身が引き締まる思いがします。

大阪商業大学附属幼稚園 築地 典子

今回のプロジェクトは私にとってとても興味深く、難しい題材でしたが幼児教育を問い直す良い機会を与えてもらえたと感謝しています。子どもの育ちを長いスパンで考え、その中で何が一番大切なのかを須河内先生はじめ、他園の先生方と意見交換出来たことで、私自身視野が広がったように思います。このプロジェクトで皆さんと出会い、ひとつの目的に向かって協力し合えたことが、とても嬉しく感謝の気持ちでいっぱいです。最後に、須河内先生には本当にお世話になりました。ありがとうございました。

関西女子短期大学附属幼稚園 岡 本 秀 美

このプロジェクトで、まず初めに取り組んだのは、今までの研究を振り返りまとめることからでした。そのことから、年々子どもの育つ環境が変わり、言葉をかけることなど人と人との関わりが薄れてきていることを実感し、かかわる力が保育にとって、とても大切であることが理解できました。年代が変わっても保護者が迷わず育児できるよう、保育者は重要な立場にあることや幼稚園という環境も保護者にとって大事な接点を持てる場所であることを改めて感じました。子どもたちや保護者と信頼関係を築いていくために、時間を惜しまずしっかり関わっていけるよう言葉を交わしていこうと思います。

最後になりましたが、24次プロジェクトでは須河内先生はじめ他園の先生方に多大なご尽力を頂戴し、心より感謝申し上げます。本当に有難うございました。

双百合幼稚園 宗 千 景

私は今までこういったプロジェクトへの参加は未経験で、長期に渡る研究を他園の先生方と協力して行う事に大変興味を持ち参加させて頂きました。これまでの紀要をひもとく作業は、今現在の保育を見直す良い機会となりました。又、思春期、そして成人期を見据えた保育に、何が必要かを具体的に皆で共有する事もできました。自園の枠から一步出て先生方と接する中で、様々な学びと気付きを与えられ、充実感と感謝の気持ちで一杯です。





あとがき

平成27年4月から「子ども・子育て支援新制度」がスタートし、幼児教育・保育を取り巻く環境は大きな変革期を迎えています。待機児童解消は急務であるし、“子育てを社会全体で支えていく”というこの制度の基本的なコンセプトは今後の子育て・子育て支援のみならず保育・教育を考えていく上でも非常に大切なことだと思います。そして、保育一元化に関しても避けては通れない問題であり、時間をかけて議論を重ねていく必要があると思っています。したがって、「子ども・子育て支援新制度」の大枠に関しては理解できます。しかしこの新制度の下、保育一元化の流れのなかで、我々は保育をどのように考え、実際に保育をどのように展開していけばよいのでしょうか。今のこの日本社会のなかで、一人ひとりの子どもがその子らしく育っていくことを可能とする保育とはどのようなものなのでしょうか。こうした保育の質の問題を考えはじめると、この「子ども・子育て支援新制度」の不透明な部分が気になりはじめます。

現状をこのようにとらえたとき、本24次プロジェクトにおける研究はタイムリーなものだったと思います。ご高覧いただいたように、本24次プロジェクトの研究は2部構成になっております。第1部は、これまで大阪府私立幼稚園連盟が取組んできた研究プロジェクトを振り返るというものでした。ここで見てきた近年における大きな研究の流れの1つは、子ども主体の保育の在り方について検討していくものでした。これは、保育における永遠のテーマ、といえるでしょう。そして、もう1つの研究の大きな流れは、保護者に対する支援や対応でした。この問題も、一時的なトピックスではなくなりました。現状を鑑みると本文でも考察している通り、保育の対象は子どもだけではなく、保護者も含めてあるいは家族単位であることをあらためて認識する必要があると思います。ここで取り上げられている研究テーマというのは、言い換えるならば保育における課題といえます。すると、上記2つが少なくとも平成元年以降継続している保育における大きな課題といえるのだと思います。我々が今、こうした課題に取り組むとき、子育てを社会全体で支えるという発想が必要になるのだと思います。そして、子育てを家庭に閉じ込めることなく、幼児期の育ちを幼稚園という閉じた系で考えることなく、関係する諸機関の有機的連携の下、今日の前に迫る課題に取り組んでいく必要があると思います。

第2部は、本24次プロジェクトの中心部分となり、人と人とのかかわりあいを主たる研究対象として、幼児期に限定しない長期的視点から幼児教育を再考していきました。ここで見てきたことは、心情・意欲・態度を育む、という幼児教育の基本がいかに重要であるかということでした。そして、そうした保育の目標の下、実践を積み重ねていくことによって、一人ひとりの子どもの自尊感情が育っていくのではないか、ということが見えてきました。子どもたちが思春期を迎え様々な問題に巻き込まれていっても、しなやかに対応し自らの生をまっとうしようとする。そして、そこでの体験を自らの育ちの糧に変えていくことができる。こうした生き方をしていくためには、自己肯定感や自尊感情が、あるいはそうした自己の土台となるものが必要となります。したがって、幼稚園はそうした自己を育む場であることが求められます。そしてこのとき、こうした自己を育むもう一つの間である家庭を視野に入れながら保育を行っていくことが、これまで以上に重要になってくると思います。

今、我々は、新制度の下で、そして保育一元化の流れのなかで、どのように保育を考え、どのよ

うに展開していけばよいのか、この問題を待ったなしで突きつけられています。そうした今だからこそ、保育における大きな課題を認識し、保育の基礎・基本となる普遍的な重要事項を大切にしながら、現状と向き合っていく必要があるのではないかと思います。本24次プロジェクトは「思春期から幼児教育を問い直す」というテーマで研究を行ってまいりましたが、結果的にこのような課題へのチャレンジになったと思っています。

また、こうした視点から、本24次プロジェクトをはじめ、これまで大阪府私立幼稚園連盟で組んでこられた全研究プロジェクトをお読みいただければと思います。そして、幼稚園全体で、あるいは同僚同士で、時には保護者を交えて、みんなで大いに議論していただければ、きっとそこから人が生きていく上で大切になるものが生みだされていくことと思います。

本24次プロジェクトが豊かな研究活動となったのは、研究員の先生方の保育に対する心情・意欲・態度の素晴らしさ故といえます。保育が終わった夕方、疲れも見せず本プロジェクトに参加することだけでも大変なことだと思います。その上、本プロジェクトの場合は過去のプロジェクトの振り返りを行いましたので、宿題も大変多かったです。さらには、過去のプロジェクトの振り返りを踏まえて長期的視点に基づく保育の在り方を探るという、実質上2つのテーマを限られた時間内で行ったわけですから、紀要完成までのあゆみは容易なものであったことと思います。本24次プロジェクトに参加されたすべての研究員の先生方に敬意を表すると同時に、さらなる飛躍をご祈念申し上げます。

最後になりましたが、貴重な研究と学びの場を提供し、活動を支援いただきました水谷豊三理事長、原史臣教育研究所長、邨橋雅広研究部長、事務局のみなさま、本24次プロジェクトにご協力いただきました関係者のみなさまに心より感謝申し上げます。みなさまと出会うことができましたことに深謝申し上げます。

大阪人間科学大学 人間科学部

須河内 貢

